

法然上人行状書圖第三十五

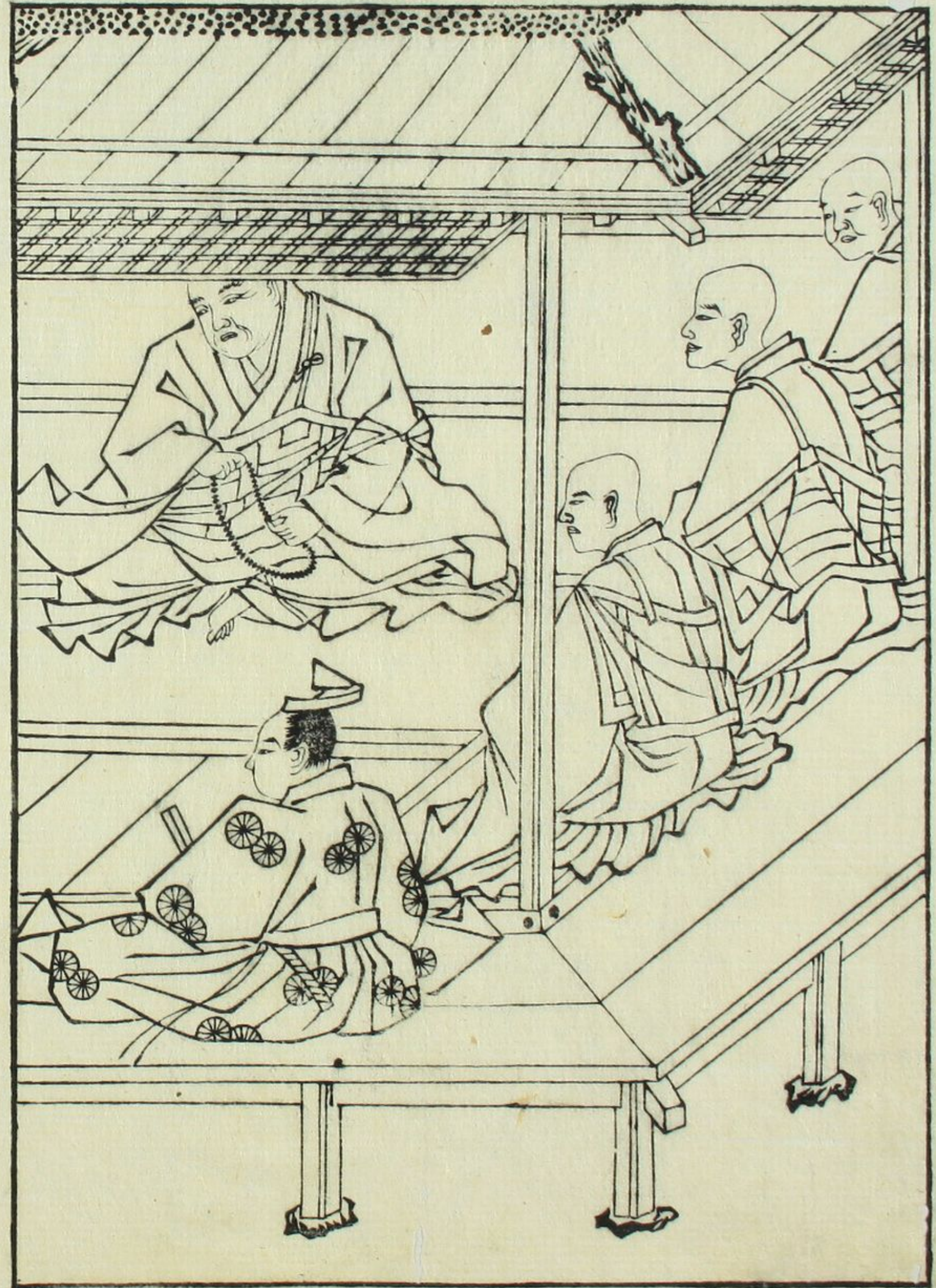
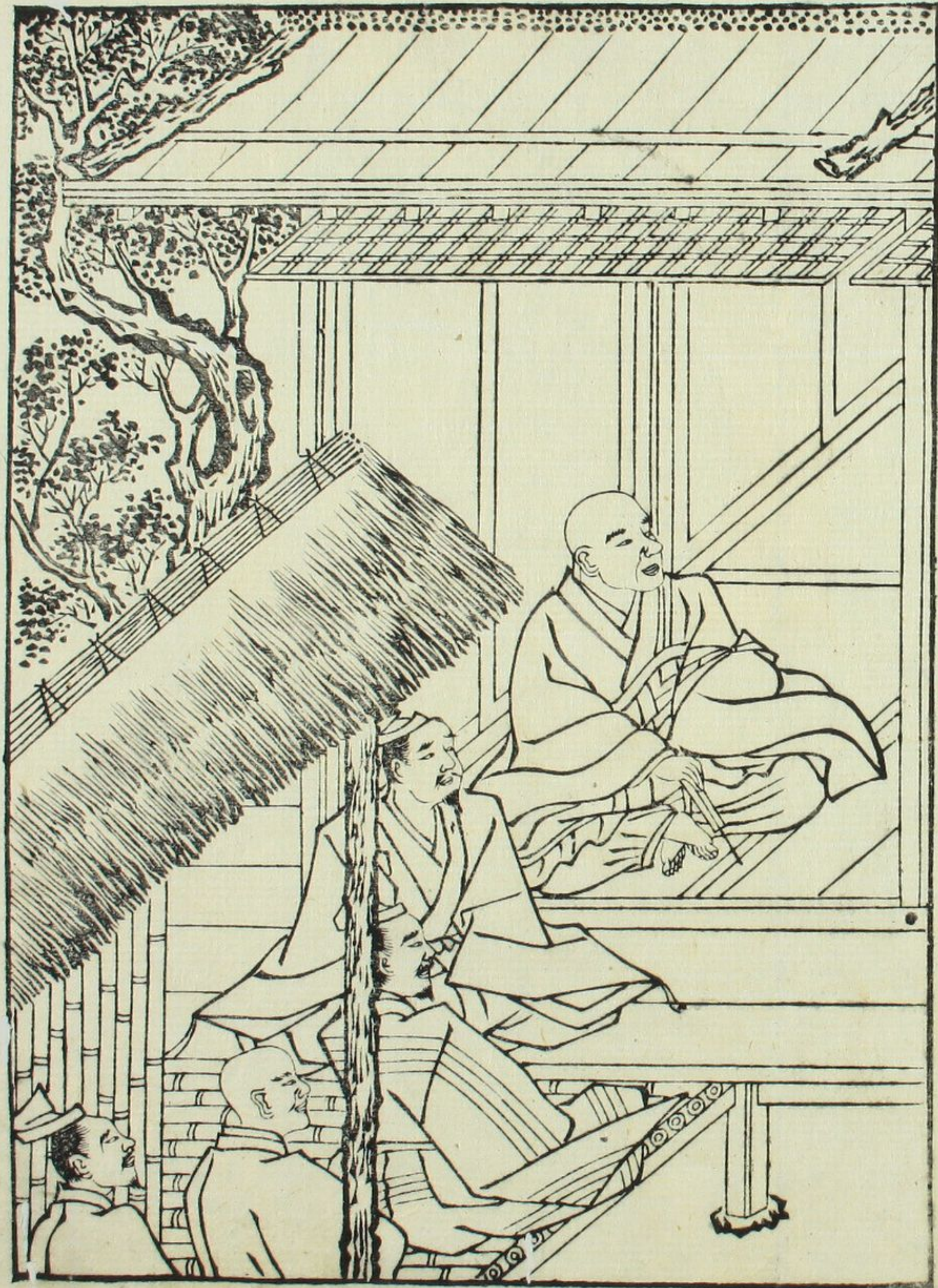
三月廿六日。讚岐國塩飽の地頭駿河推守高階  
保遠入道西忍さいにん館たたら入りはき強つよよらり。西忍去  
夜の夢ゆめ。満月輪まんげつりんれひら赫くさく変やたるがあまに  
やころやう見てあやーと思ひなると上人おんじん入御  
あむれん。此事このことなりなると思ひあせむ。  
薬湯やくとうをまふけ。養膳いげんをそのへはましくにそへ  
けたてまひる。上人念佛往生にぶつじやうじやうれ道みちこゆらに

九曜文庫

7



けりを強々り申よそ不輕大士杖木尾石を  
 志のひて四衆の縁をびすひ強一ごとくい  
 ちるるり事強めごとくしてま人をすめて  
 念佛せしめんたよへあへて人のよめに結しぬ  
 そとくへ強く附屬し強なれいぬくおほせの  
 ひひをよそもろくをぞ申なるぞちらひ  
 自行化他念佛のほへ他事なりなり

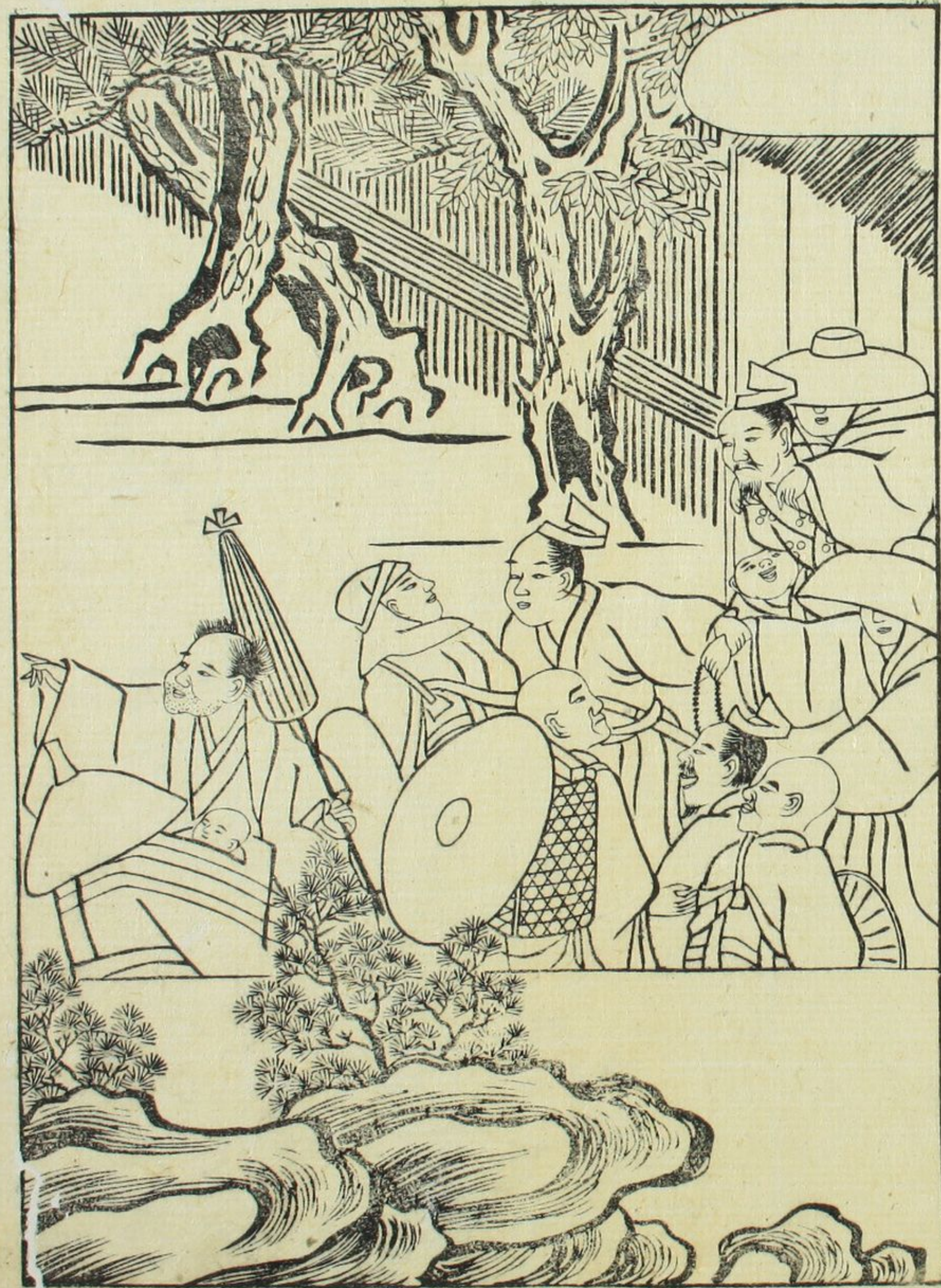




讚岐國子松庄（あなまきのくにこまつのぢま）よれらけいさ強（つよ）よらわ。當庄れ  
 内生福寺（うちふくじ）といふ寺よ住（すま）して無常（むじやう）れといふを  
 とり念佛の行致す免強々（めんじやうじやう）れん。當國近國の  
 男女貴賤（おとこめきけん）化導（くわどう）り志（し）るかゆ（か）をれ市（いち）れし。  
 或ハ邪見放逸（よこしまはういつ）れ事業（じぎやう）をあしめ。或ハ自力  
 難行の執情（なんぎやうしやくじやう）をすく。念佛よ歸（かへ）し往生を  
 こころをれおほりらわ。邊（へり）去（さ）れ利益（りやく）を思（おも）へ。  
 朝恩（あそん）なりとよろわこび強々（つよじやう）を。

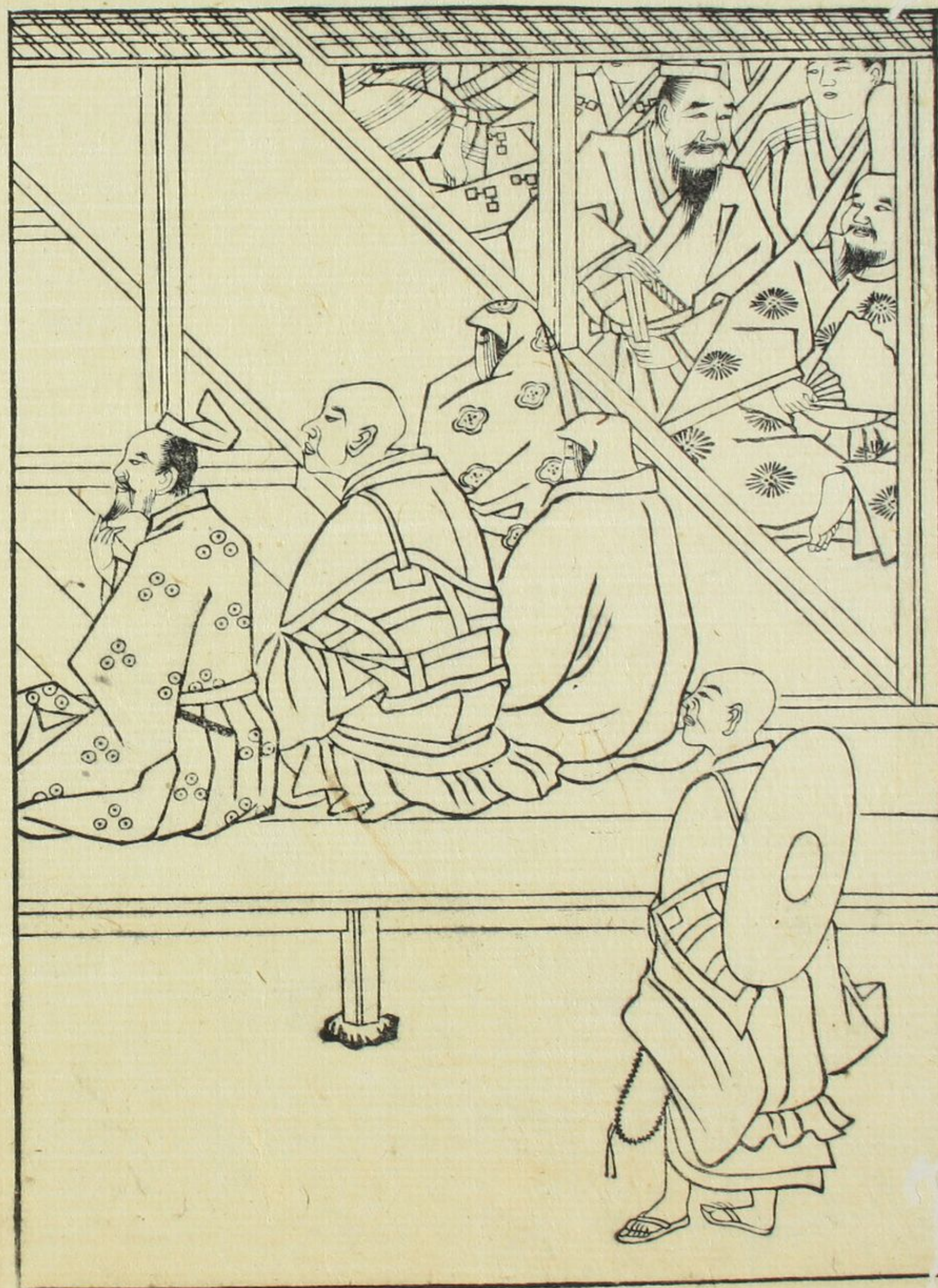
らわよぞおぼえ侍る。此寺の本尊。そこし  
阿弥陀の一尊にており。より。今。在國の  
あひ。脇士をほく。く。れ。ま。ら。う。ち。勢  
至をい。上人。い。く。は。く。り。て。法。然。本。地  
身大勢至菩薩。為度衆生。故。顯。置。此。道。場  
我毎日影向擁護歸依衆。必引導極樂。若我此  
願念不令成就者。永不取正覺。とぞ。此。を。れ  
の。勢。至。れ。化。身。と。し。て。ま。づ。く。と。れ。身。を

あ。り。な。れ。と。申。さ。れ。今。の。法。に。い。く  
た。う。と。事。に。て。ぞ。侍。る。











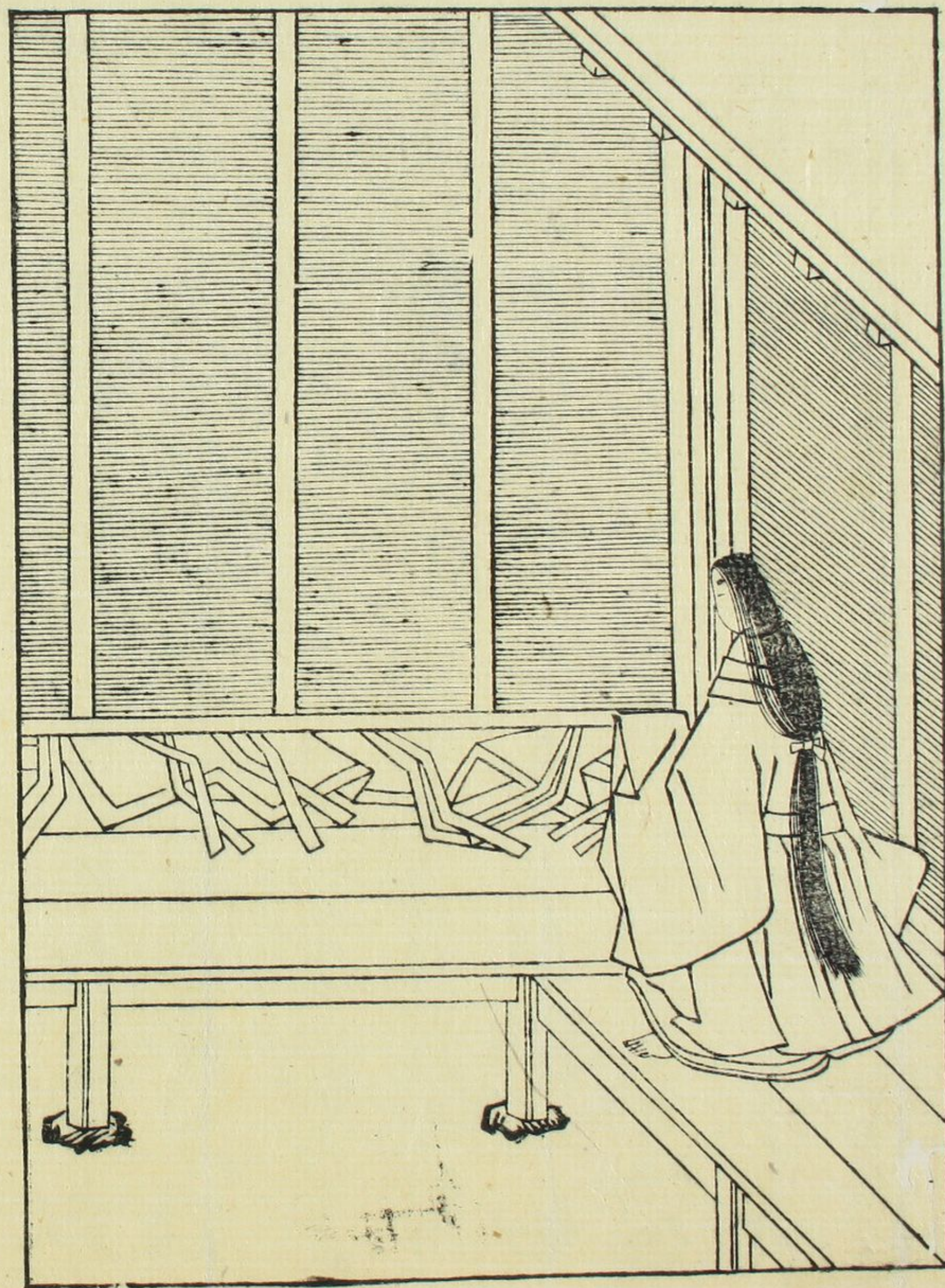
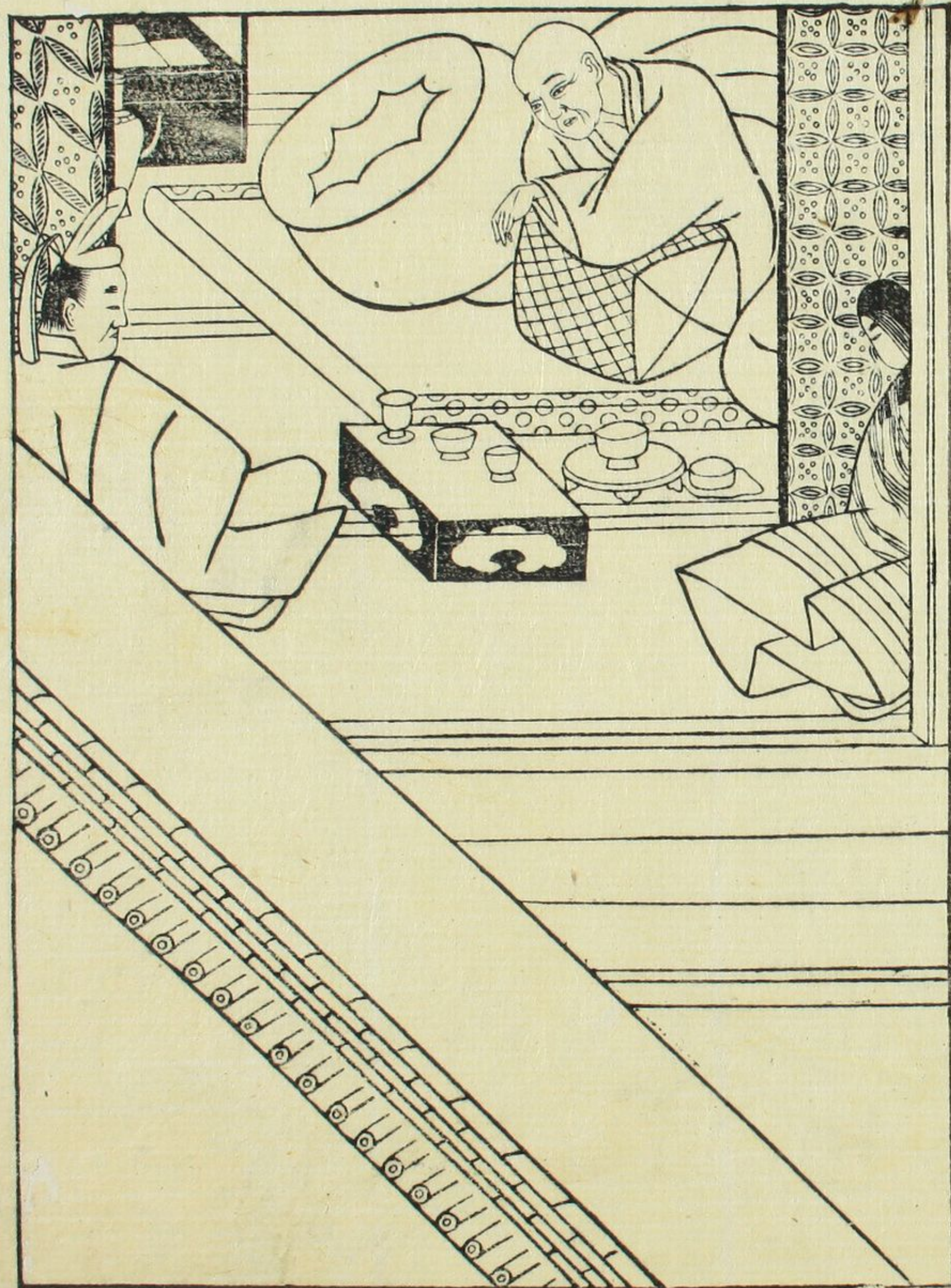
上人上人遷遷めらら月輪月輪のの禪禪問問朝朝暮暮乃乃御御歎  
 ああささかかれれとと回回来来乃乃御御不不食食いいままくくににまませせ  
 於於てて大大漸漸のの期期ららししほほくくせせ給給ぬぬ藤藤中中納納言言光光親親  
 御御ををめめししてて位位ををううれれななるるはは法法然然上上人人年年来来  
 歸歸依依ののいいららばばららぶぶめめてて存存知知ああるるんん今今度度のの  
 勅勅勘勘をを申申ゆるゆるささげげししてて請請所所へへううらられれ  
 めめるる事事いいままくくてて世世りりああるる甲甲斐斐子子記記にに似似ららりり  
 三三つつれれもも嚴嚴旨旨いいららかかしし所所左左右右ぬぬ申申ささんん

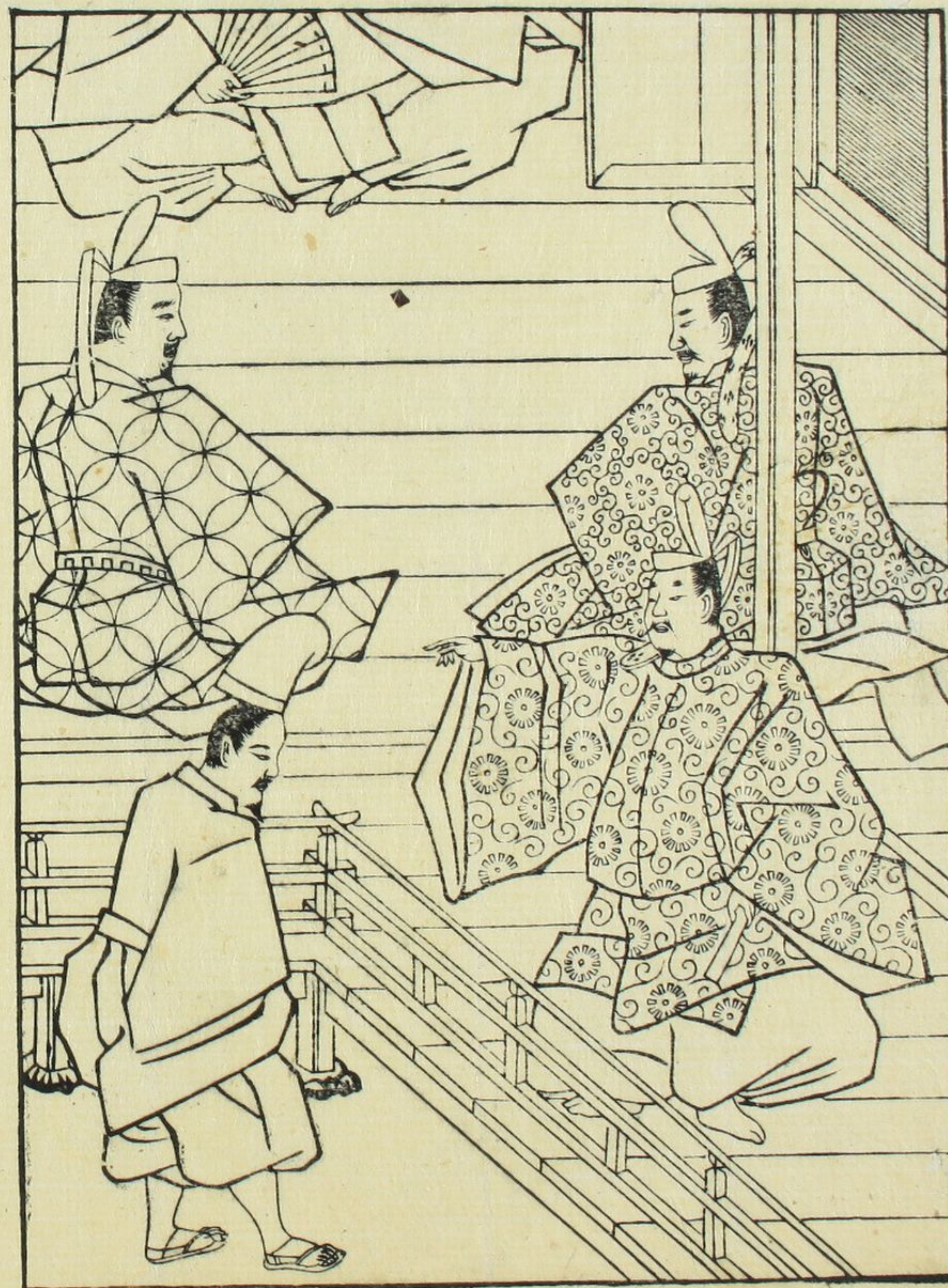
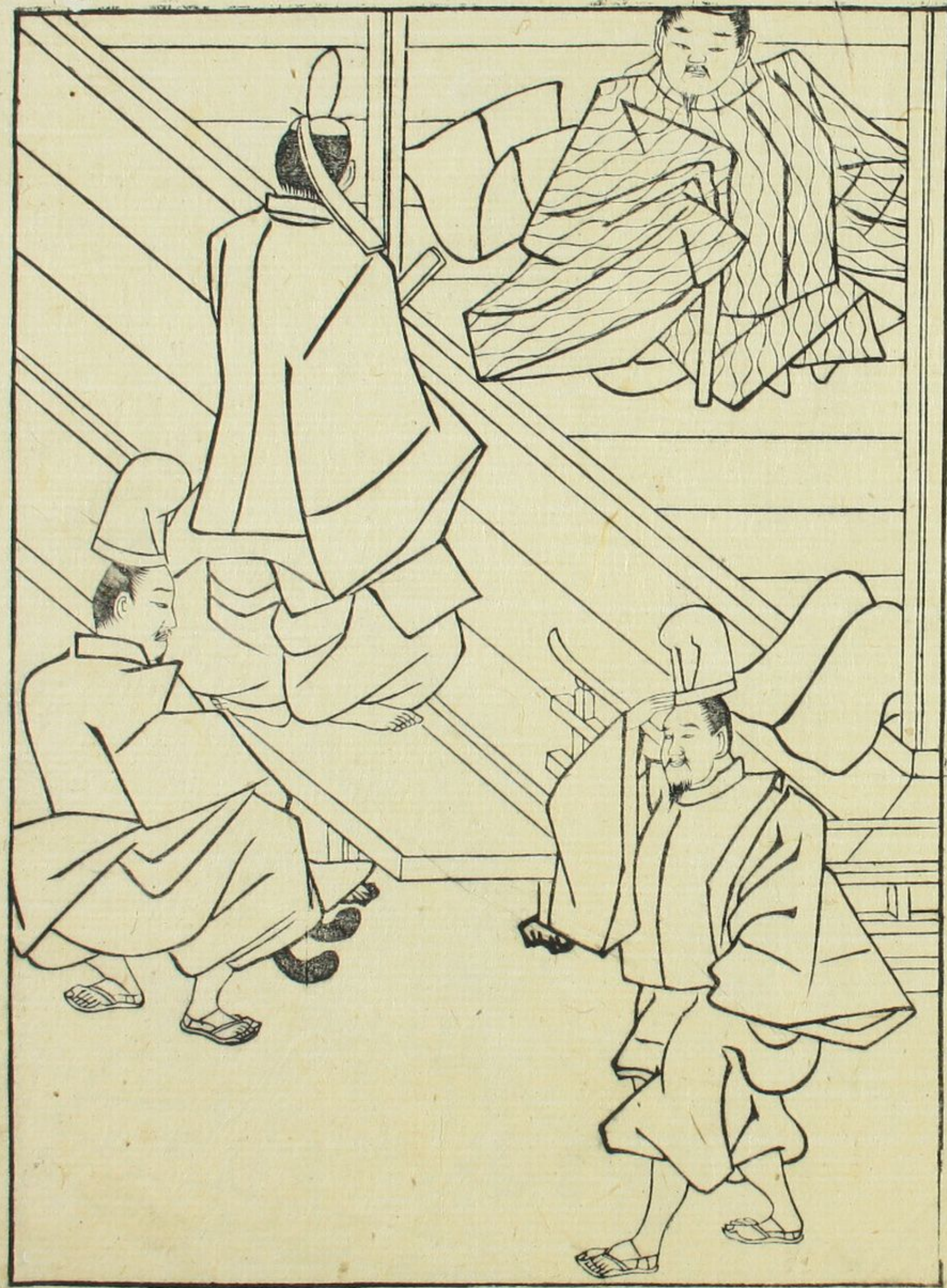
しをば我おぼゆる遊べし。後日を期して  
すぐるころよ。とて終焉よれとめり。今  
生れしこの事にあり。我他界よ。おとし  
いゆし。連てよ。御氣色をうらひて。恩免を  
申をこたふるべし。と。かまきり。此位に。此を  
光親。卿位のじし。更よ。如在。存ず。へり。はる  
より。申して。涙を。わら。さ。同四月五日。御  
臨終。正念。よ。念佛。數十遍。禪定。よ。い。る。が

ごうして。往生を。さ。げ。せ。給。ぬ。御。う  
五十八なり。上人。左遷。を。ら。い。く。程。な。り。て。この  
御事。さ。こ。え。々。り。御。あ。り。我。を。し。ら。る。へし。  
後。京。極。殿。老。ら。ま。だ。せ。給。ぬ。其。御。子。東。山。の  
禪。問。家。督。に。て。御。あ。り。け。つ。つ。せ。給。ま。す。月。輪。殿  
御。歸。依。れ。餘。慶。を。う。け。お。め。く。上。人。に。勸。化。を  
御。信。作。あ。り。な。り。こ。う。に。六。方。恒。沙。乃。諸。佛。の  
證。誠。を。た。う。と。ん。て。阿。弥。陀。經。十。萬。卷。摺。寫。れ

大願をたうがうよ。異朝よひくをせりて  
摺寫れ弘通をひろくせらる。れ經にほく  
吾朝よ流布せり。發願の志趣經に奧にのせらる  
うれ狀云。十萬の寫切よらりて。萬德れ尊容を  
禮し。殊絶れ說法をききて。普賢の願海よ  
いり。隨類の形を化現し。く。舊去の徒を慈  
愍し。あやしく長夜の寐より。成をとりて。  
いづく覺悟の曉よ。いづくめん。衆生無

始の身宴坐た。眼よあり。塵點劫數の業  
ころを志す。じるに念をいて。と。良哉これ筆  
言。いづくこれ言語。いづく人事。寐うつくハ  
紫金の毫光。白骨の微切をて。く。後へり。  
于時文曆第二歳し。未仲春第二日。後一位  
藤原朝臣道家敬白。云。發願のじの自他を  
い。異朝よをよぼして。それ願をく。それ  
今御と。いづく。いづく。いづくも。いづく。







三十一



三十二

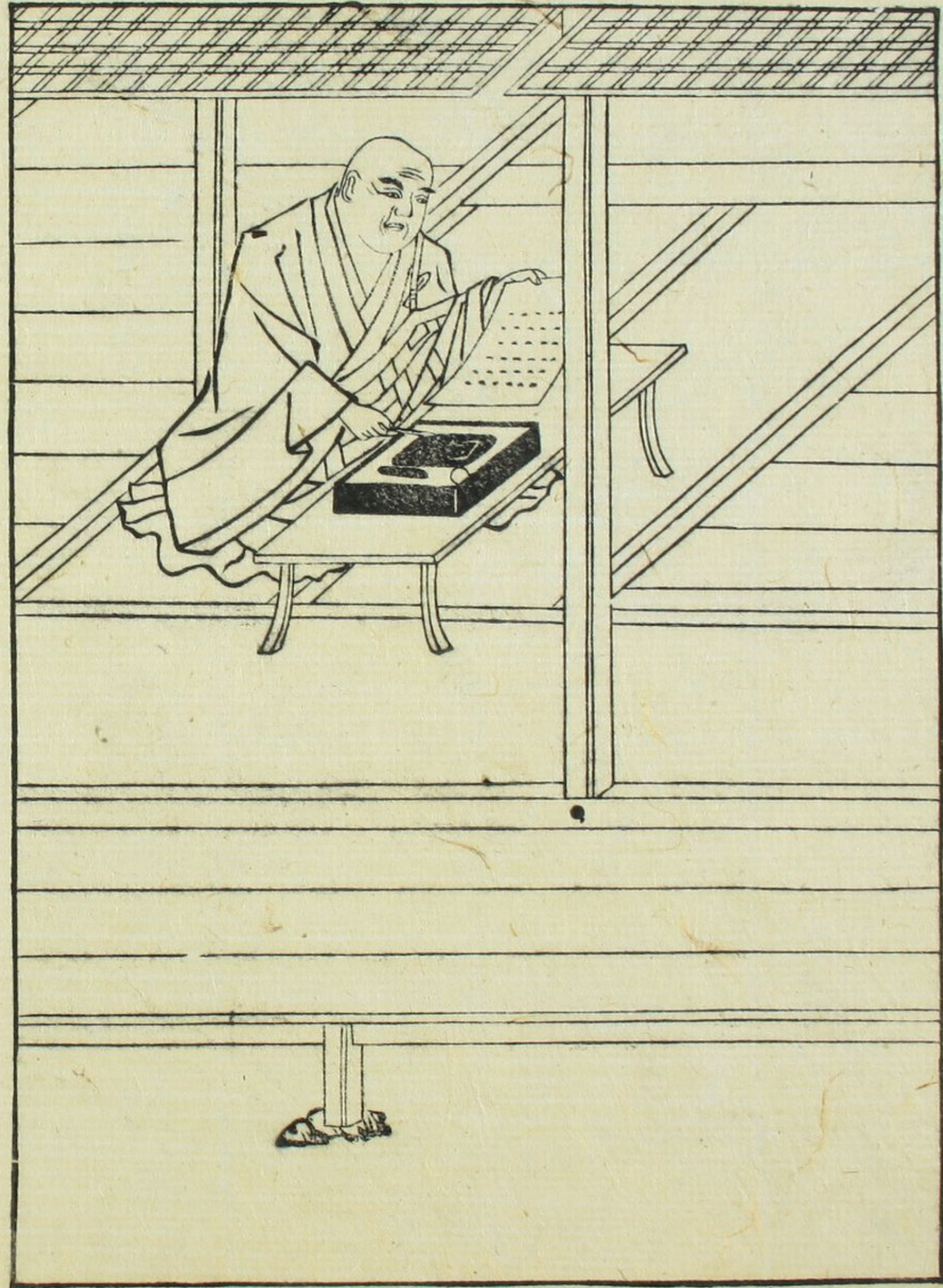
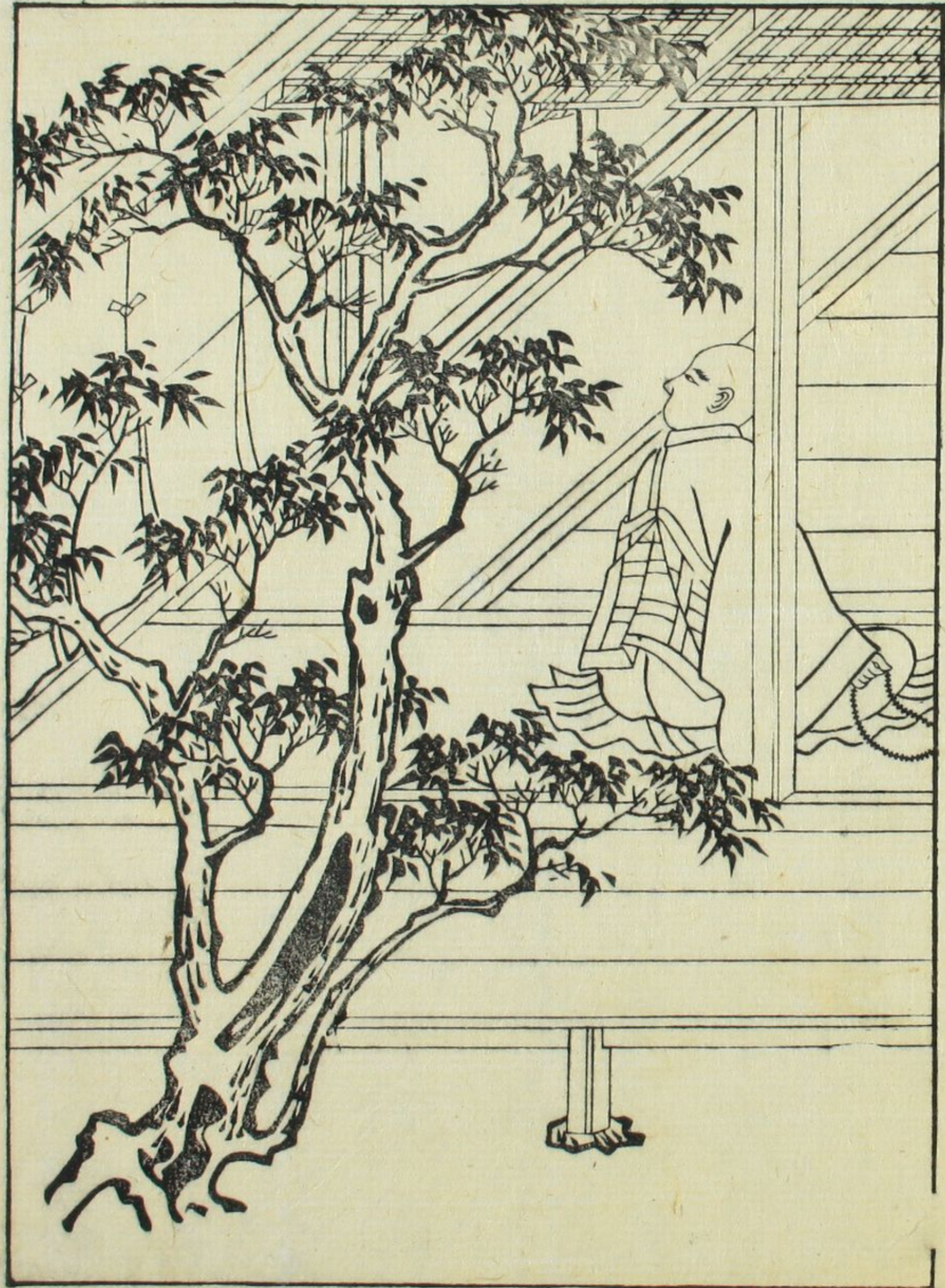
上人流刑せり。遠近よきこえり。は津戸  
三郎為守たのむねうつくしをあらたて遠遠とつとれは  
ふひたるといへとも。武藏國むさしのくにより讃岐國さぬきのくにへ書  
状を進ずるとき上人の御返事云。七月十四日  
御消息ごうし八月廿一日よん供ぬらう。おれはひよ  
うきに信じて供御うらう。申はくと  
ぬらう供ぬらうに志す人き事よて  
やうに供うつくし申うらりれを供。但今生乃

事いよまじよはたてをよまも人をたひした  
ぬき事にて供いひてもいとんと思食へく供。  
おぬあといき志り供のぬ身りかむぬん後  
見供。心よき事よて供へらる。はまこころ  
穢み土どたひよて供へらる。はまこころ  
せどやこころと思供へらる。こまは遠眼の  
事たひらひゆえよも思食へらる。供供。志  
ぬき身は宿報と申。又穢み悪あく充満ちゆうまんせらる。ひ





ふれよふれよとぬ事には入んたふれ事なり  
法事つてもあつたふれに往き候ふ事なり  
思ふ事つたに候。云御文たれとてあつた  
ふれよふれとほえ候なり



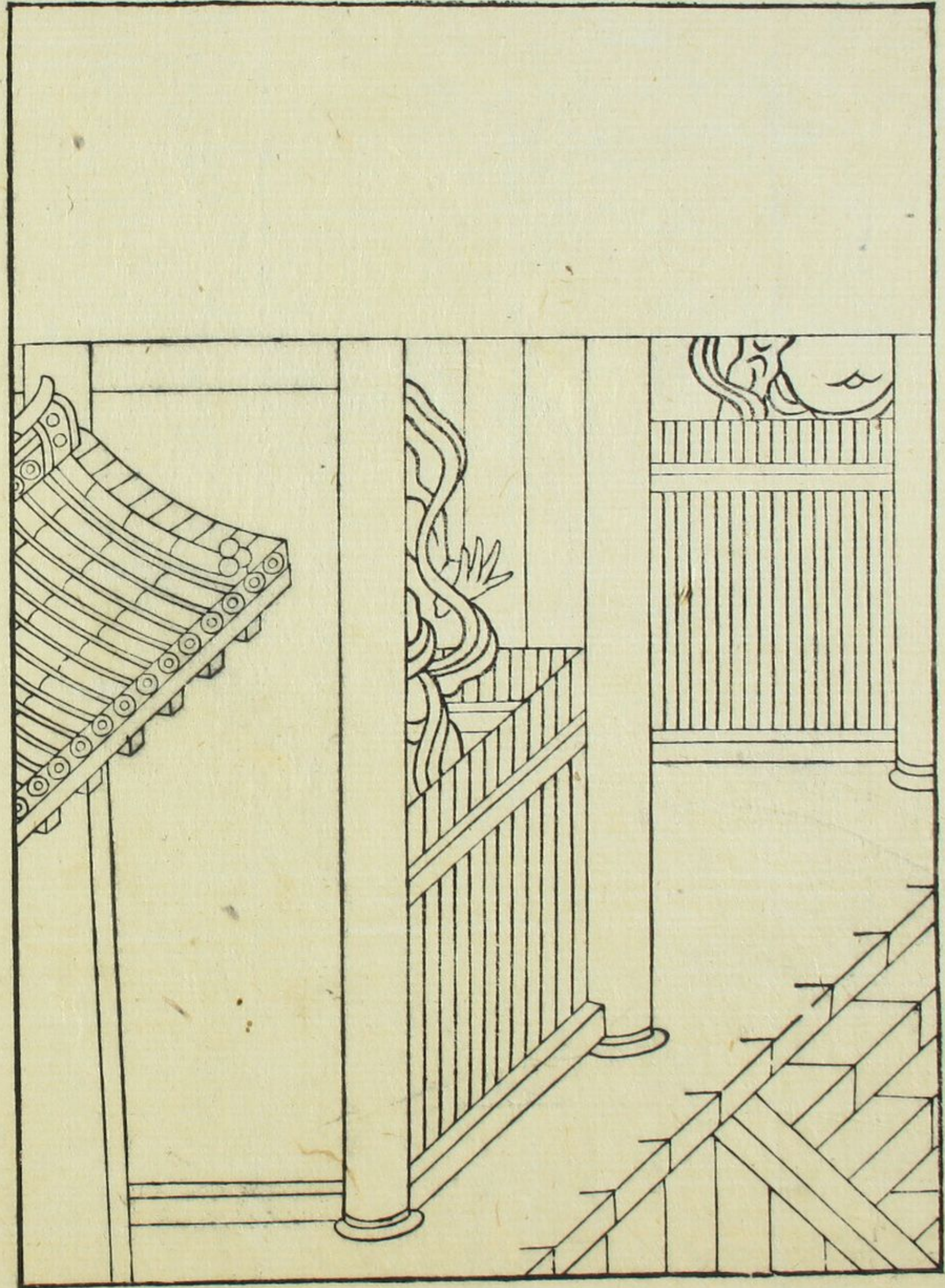
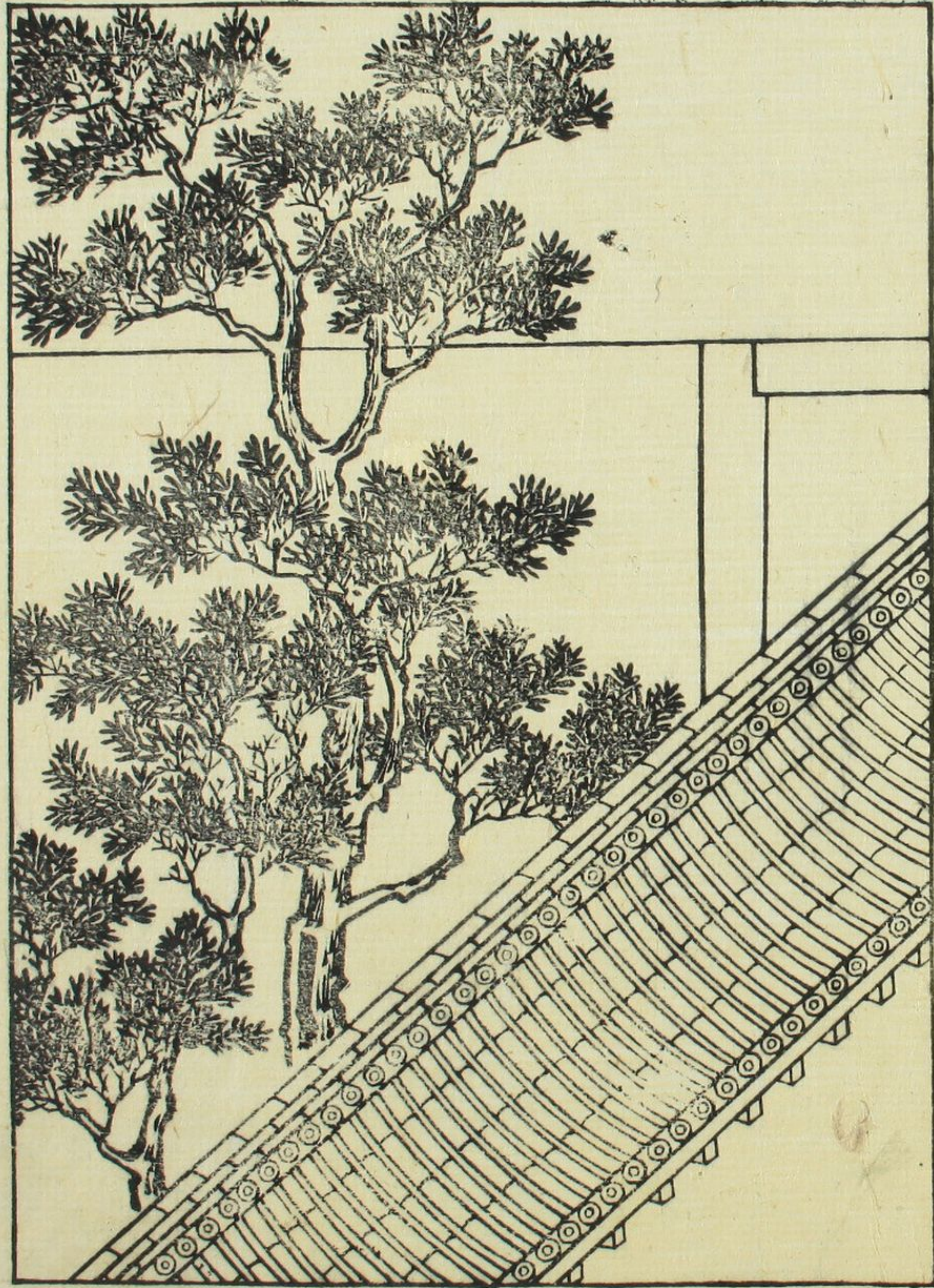
直聖房といぬ僧ありき。上人（弟）弟子（と）なりて。  
一向專念（の）行を修（と）ありき。あるとき熊野山（へ）まいり  
たりき。上人の配流（を）されしを（も）知りて。返（り）て  
いと下向（せん）と志（を）する。よるに重病（に）臥  
うけて。下向（れ）いふらむ。死（ん）ころり  
権現（い）たり申（き）する。に。僧の夢（に）臨終  
す。よらうけたり。下向（志）するべからず。法然  
志（を）知り。死（し）れし法然上人の御事（あり）に

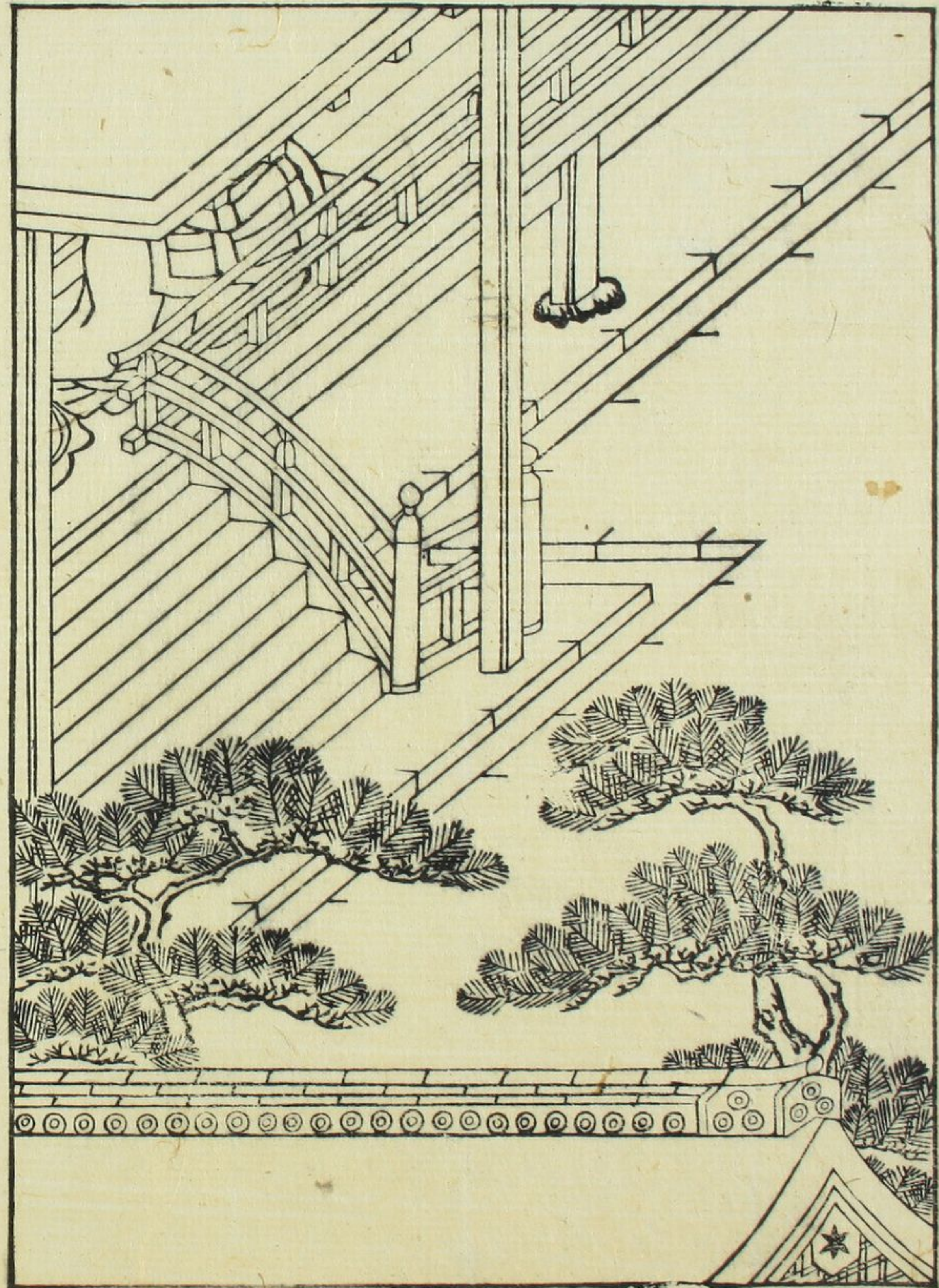
たがつれく。僧へば。よく下向（して）うけ  
たまはらむ。僧と申（ら）れし。上人（の）勢至  
菩薩（の）化現（なり）。不審（す）へら。法（を）しりて  
志（を）知り。たほせし。夢（に）見（て）夢（に）見（ぬ）。其後（い）を  
ほこを。臨終（して）。往生（せん）候（ふ）。  
こげよらむ





上人じゆうじん在國ざいこくのあひび國中こくちゆう靈驗れいげん地ち巡めぐ礼らい—  
 殆たいてい始はじめ中ちゆうに善通ぜんつう寺じとい始はじめて—弘法こうぼう大師だいし父ちちの  
 ためにとてとられたる寺じ始はじめらるる寺じ乃なり  
 記文きぶんよひさしひをちうしてたん人の始はじめる始はじめ  
 一佛いつぶつ淨土じやうど地ちとて—とありこのひれ  
 思おもいてこの事こと始はじめらるる事こと—ひたれはせ  
 られ今いま始はじめ





法然上人行状畫圖第三十六

月輪殿げんごんのにほせをさるゝ趣たしきをさるゝ光親みつちか卿きやうにび  
く申入まういれし家いへといへり。教慮えいりょたる後のち心こころより後のち。  
あるに上皇じやうかう御夢想ごむさうに御事ごじありける。人  
中山ちやうせんの相國さうこく公こう頼實らいじつ。嚴親げんしんの善知識ぜんちしきたり。因縁いんえんを  
とすに流刑りゅうけいの事こと成なげたまひて念ねん  
佛興ぶつこう行ぎやう事じ。いづれに佛意ぶつぎよきとていづれに人ひと。  
門弟もんていありやまの法はうをもちて。とてを師しととなり



をよぶされ。罪科<sup>つひ</sup>てしほ事<sup>こと</sup>眞鑑<sup>まけん</sup>もかり  
かきまよし。志<sup>こころ</sup>まじりにいさ免<sup>ゆる</sup>申<sup>まを</sup>給<sup>たま</sup>ふに。お里  
しに寂勝<sup>じやくしょう</sup>四天王院<sup>しつてんおういん</sup>供養<sup>くやう</sup>よ。大赦<sup>たいしやく</sup>改<sup>かへ</sup>をここれ  
いさ々<sup>いさざ</sup>に。それ御沙汰<sup>ごさた</sup>ありて。同年<sup>どうねん</sup>十月二十五  
元年<sup>げんねん</sup>十二月八日<sup>じふにがつはちにち</sup>勅免<sup>ちうくわん</sup>れ宣言<sup>せんげん</sup>をさるは。まじり  
ふれ状<sup>じやう</sup>云

大政官符<sup>たいせいぐんぷ</sup> 土佐國司<sup>とさのくに</sup>

流人<sup>りゅうじん</sup>藤井元彦<sup>ふじのむねひこ</sup>

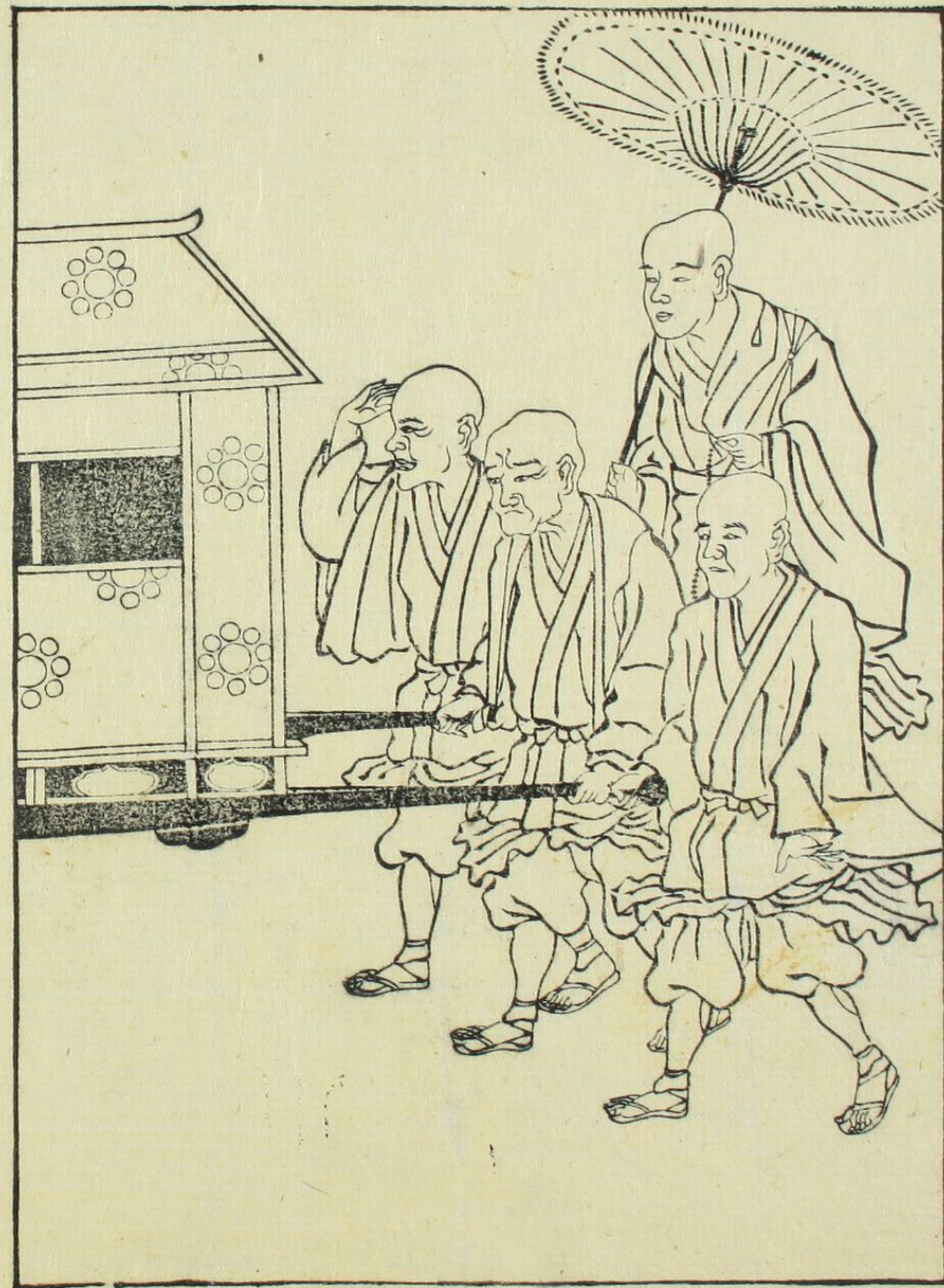
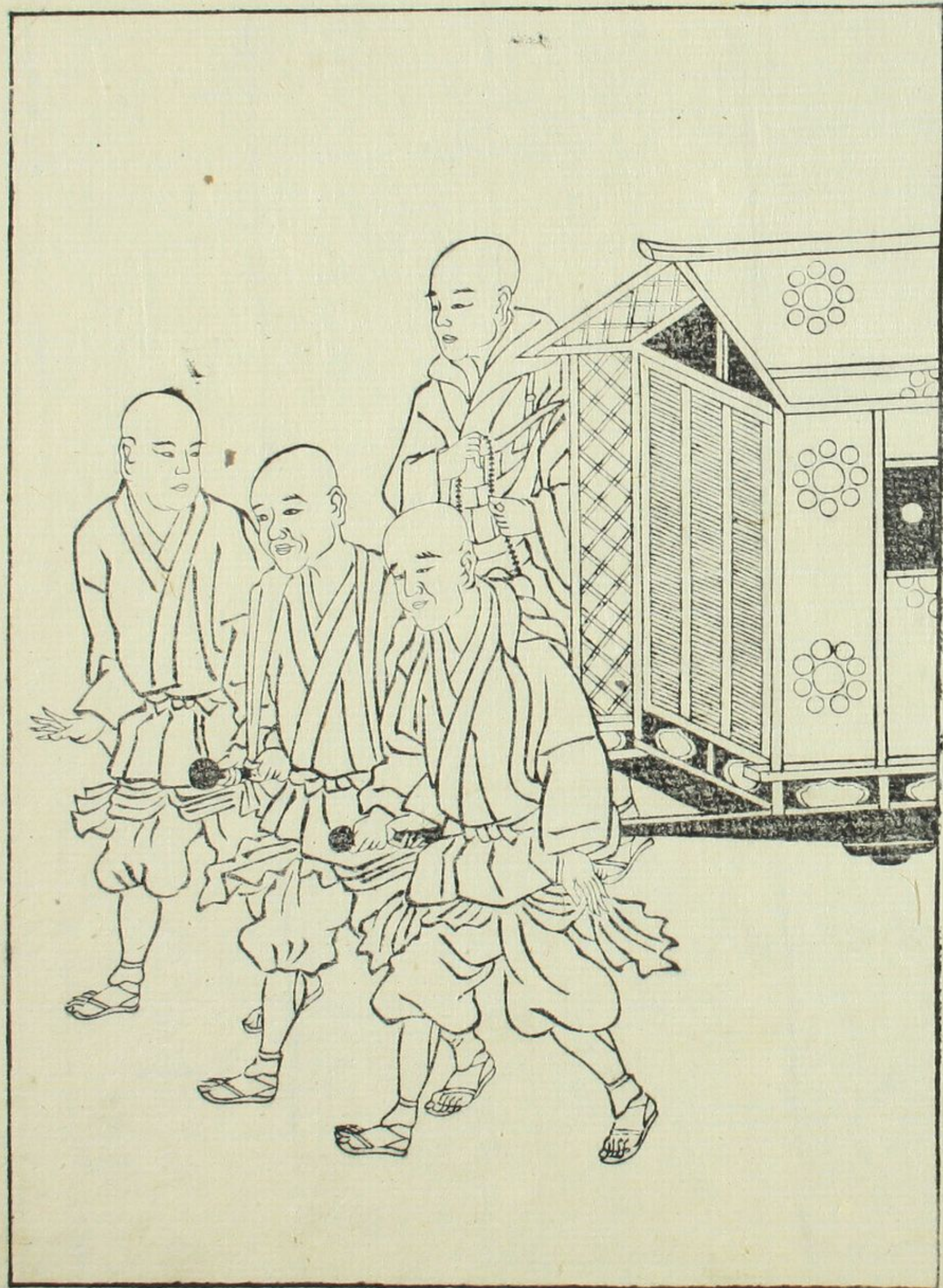
右正三位<sup>みぎただよ</sup>行權中納言<sup>ぎんけんちゆうなごん</sup>兼右衛門督<sup>けんゑもんとく</sup>藤原朝隆<sup>ふじのわらけ</sup>隆衡<sup>たかひら</sup>  
宣奉<sup>せんぷ</sup>勅件<sup>ちうけん</sup>の人<sup>ひと</sup>。二月廿八日<sup>にがつにじはちにち</sup>事<sup>こと</sup>に。は。こ。し。て。  
ふれ國<sup>くに</sup>に配流<sup>はいりゅう</sup>志<sup>こころ</sup>ほを。お。よ。と。る。あ。は。り  
ふりて。こ。し。に。め。か。へ。し。じ。但<sup>たゞ</sup>よ。後<sup>のち</sup>に。幾<sup>いく</sup>の  
内<sup>うち</sup>に。居住<sup>くぢゆう</sup>して。洛中<sup>らくちゆう</sup>に。往還<sup>おうげん</sup>する事<sup>こと</sup>か。ら。る  
る。者<sup>もの</sup>國<sup>くに</sup>より。兼<sup>けん</sup>知<sup>ち</sup>して。宣<sup>せん</sup>に。よ。りて  
こ。此<sup>こ</sup>紙<sup>し</sup>を。こ。か。へ。符<sup>ふ</sup>到<sup>たう</sup>奉行<sup>ふりやう</sup>

兼元元年<sup>けんげんげんねん</sup>十二月八日<sup>じふにがつはちにち</sup> 左大史<sup>さだち</sup>小槻宿禰<sup>こつきしゆくね</sup>

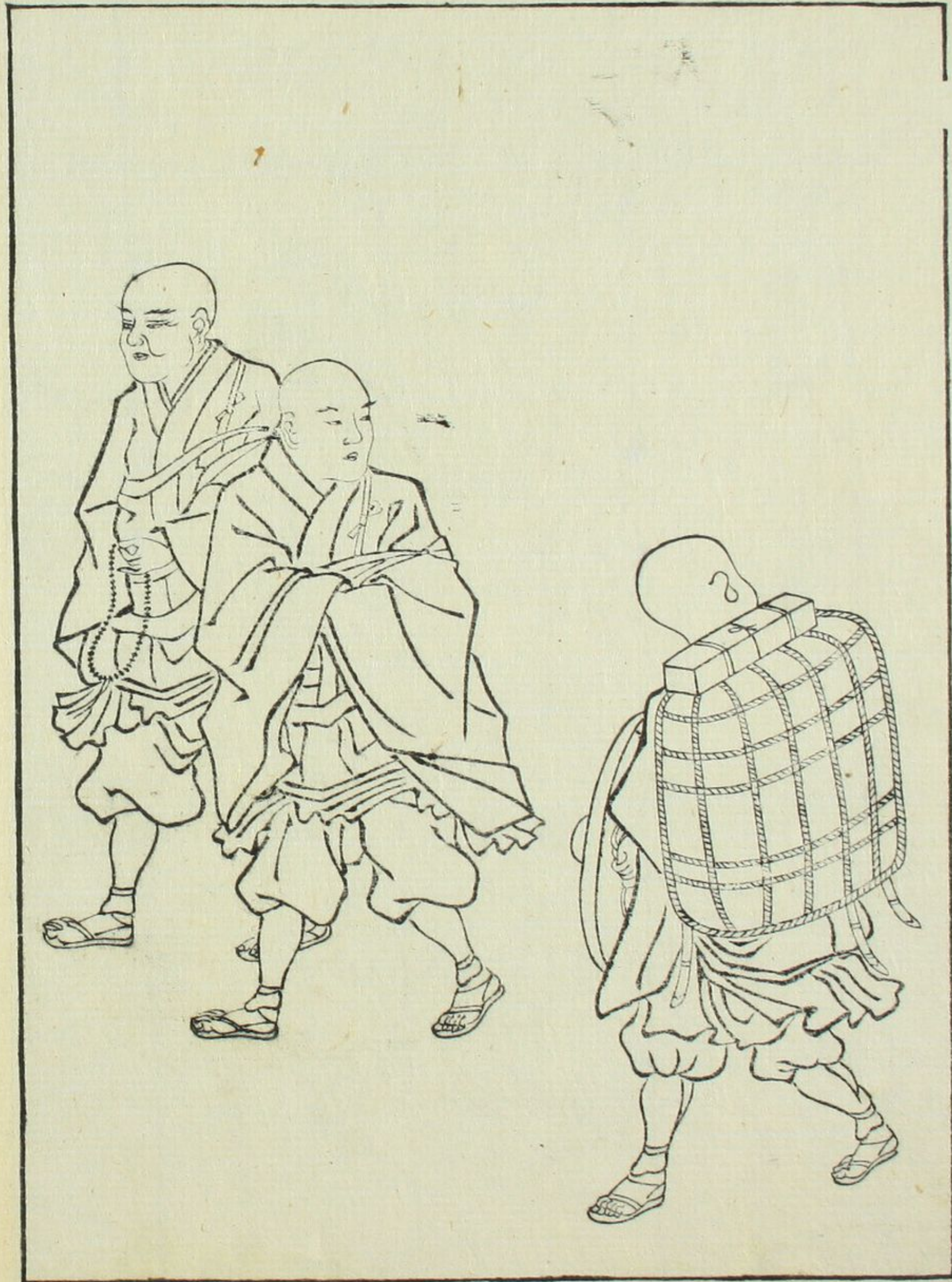


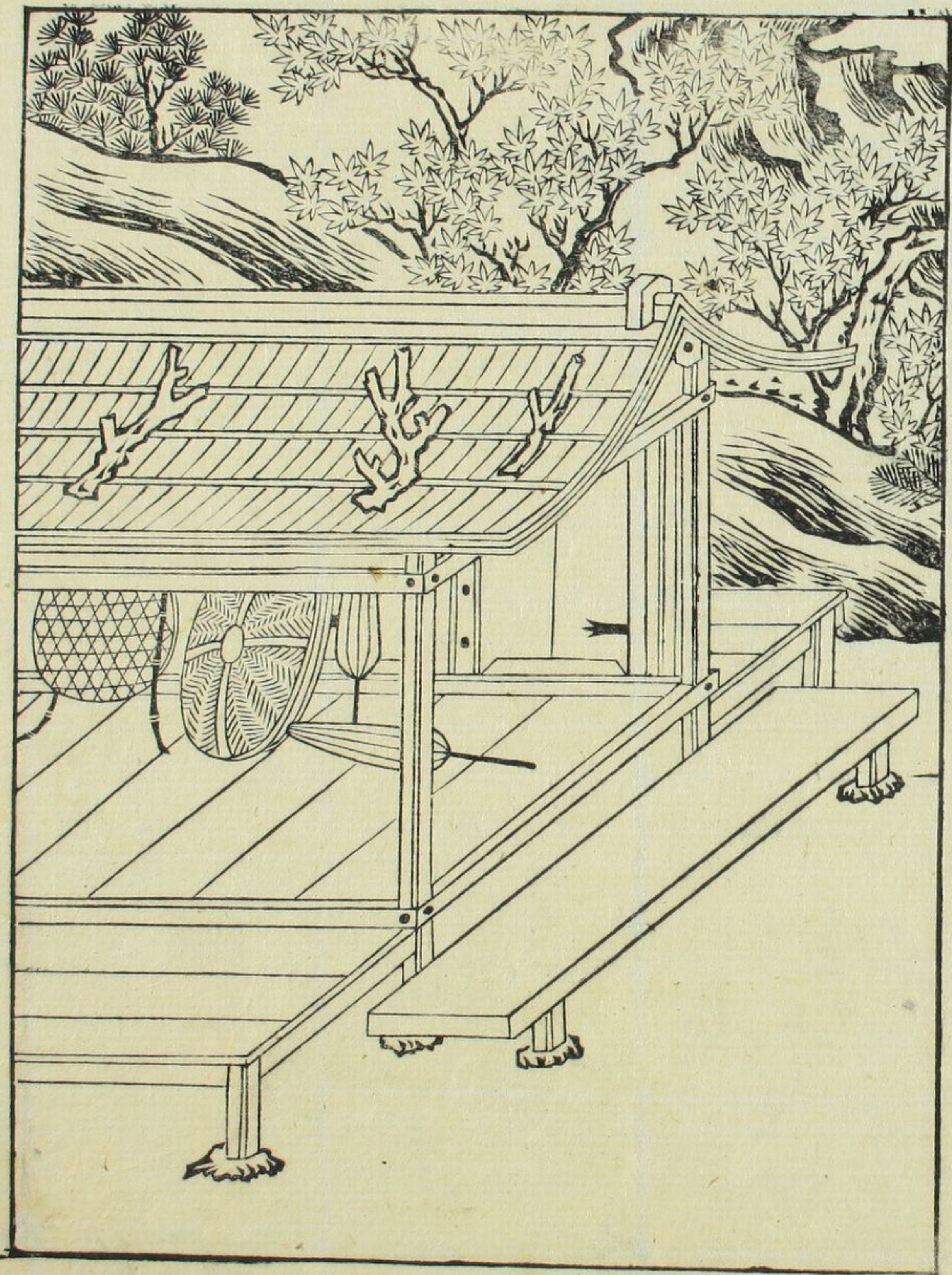
権右中辨藤原朝臣

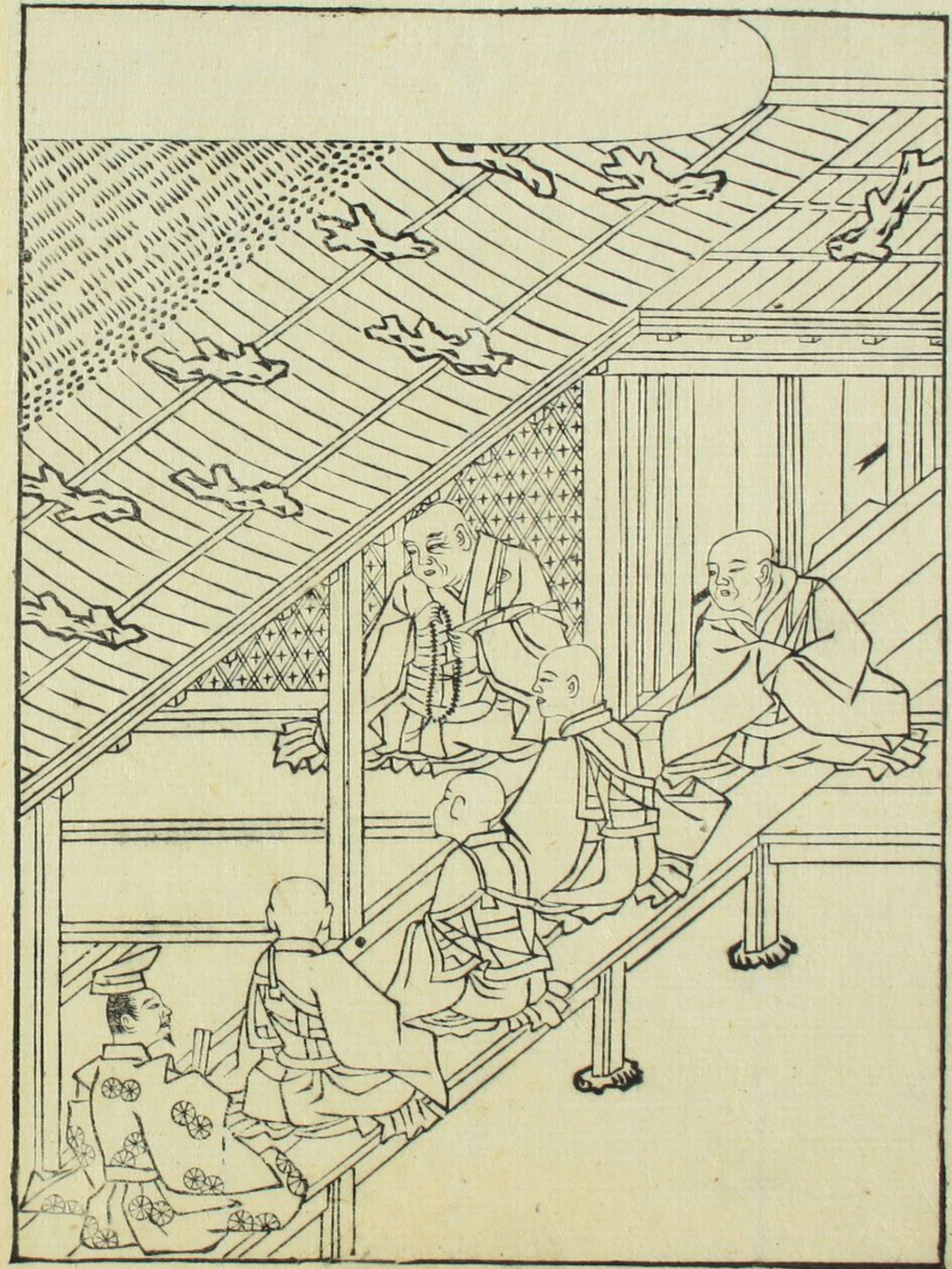
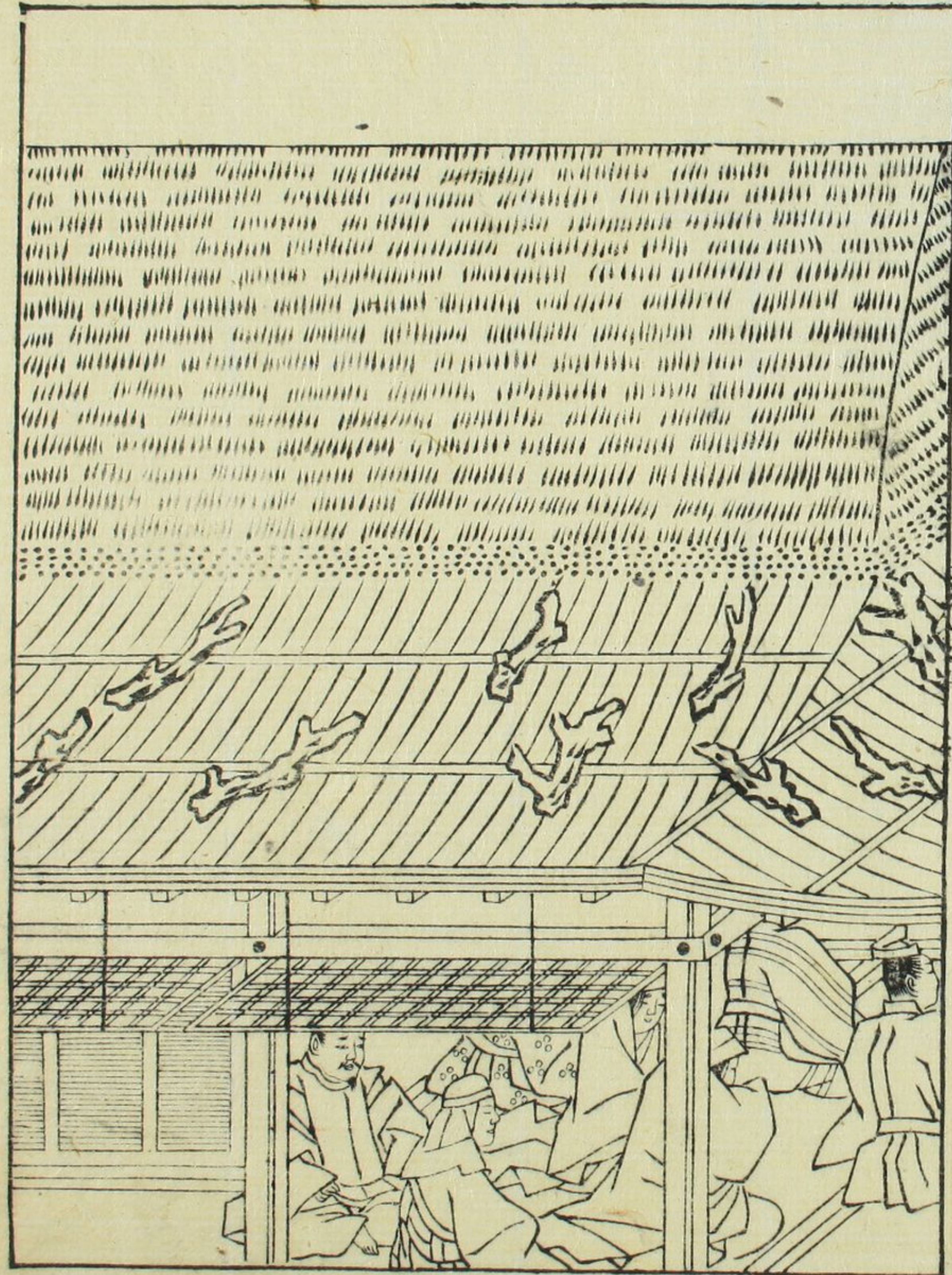
勅免<sup>ちくめん</sup>れより都鄙<sup>とひ</sup>よきこえしは京都乃  
 門弟<sup>かど</sup>の再會<sup>さいかい</sup>越ゆるるび邊鄙<sup>へんひ</sup>れ土民<sup>とみ</sup>の餘波<sup>あまなみ</sup>を  
 行<sup>ゆ</sup>じよ為<sup>な</sup>こびとたげきとあひれんよぞ  
 侍<sup>さむらい</sup>と今<sup>いま</sup>も



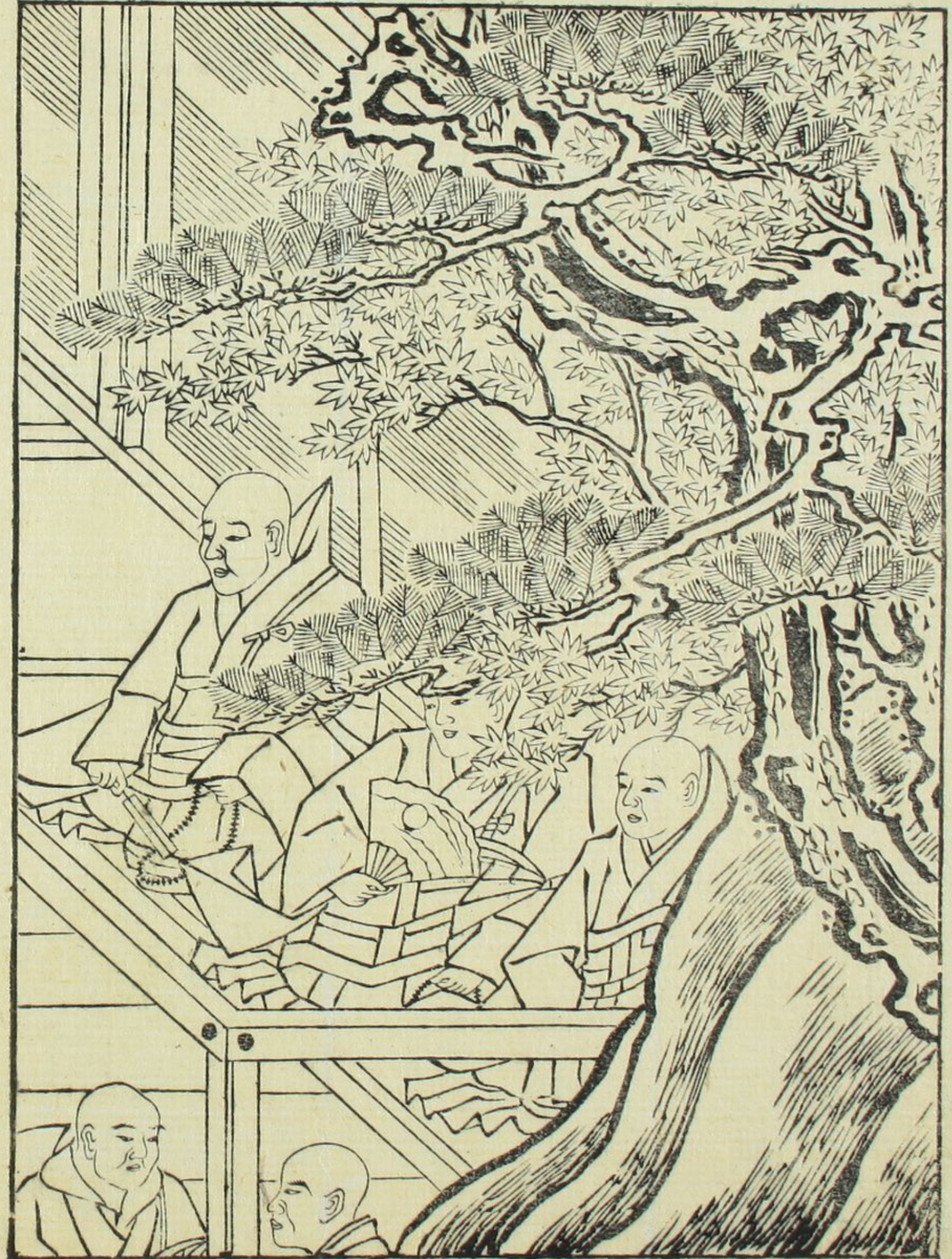
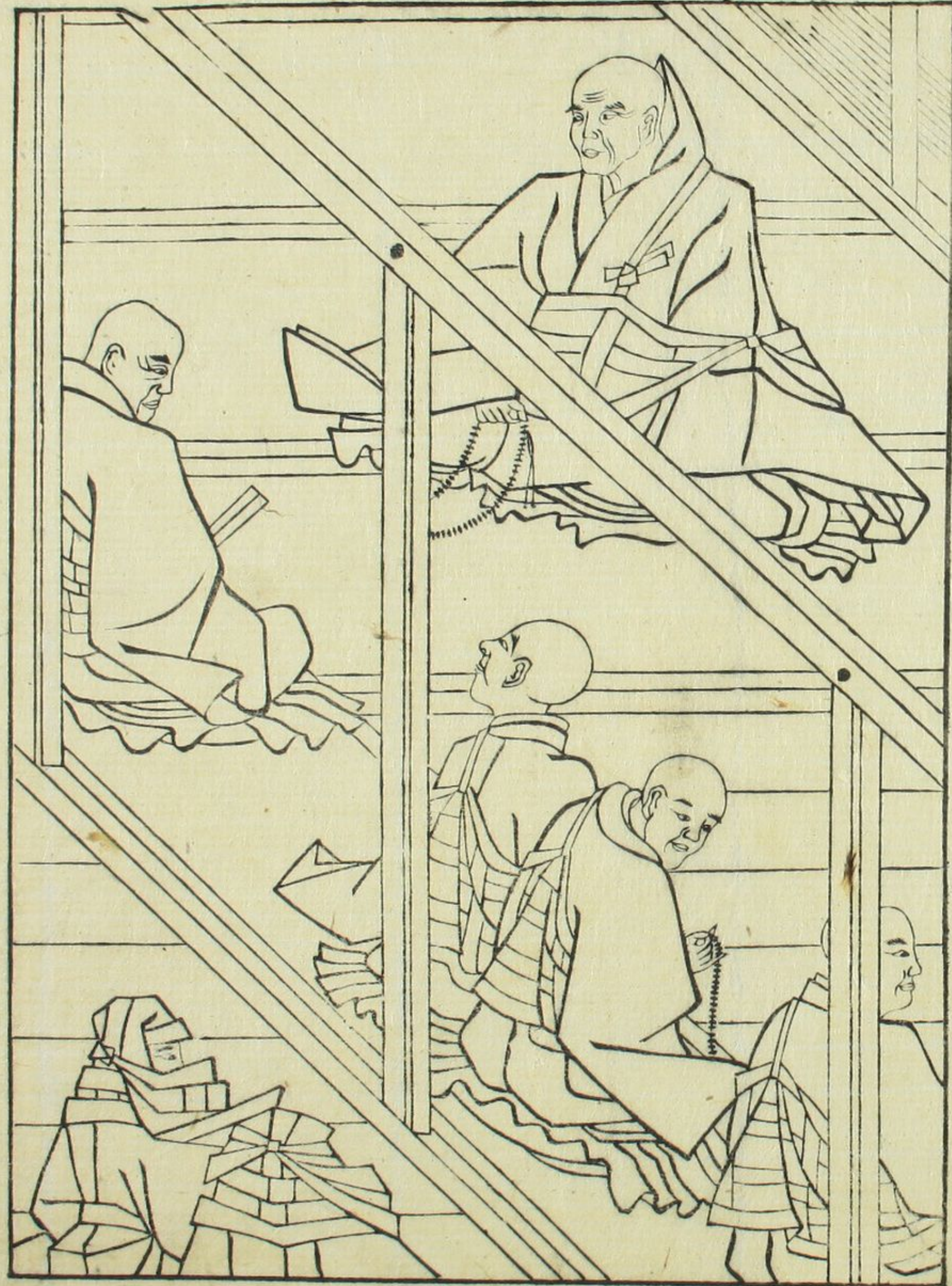
上人勅免くわんめんよあづり給て國をいへこのがり  
 給ぬ。攝津國押部といぬおしべよ志こころらくらく這こる  
 たりふ老少男女らうしやうをすく免て念佛門ぶつごもんよいさ給  
 事かごと誠志まことあづらわらるる



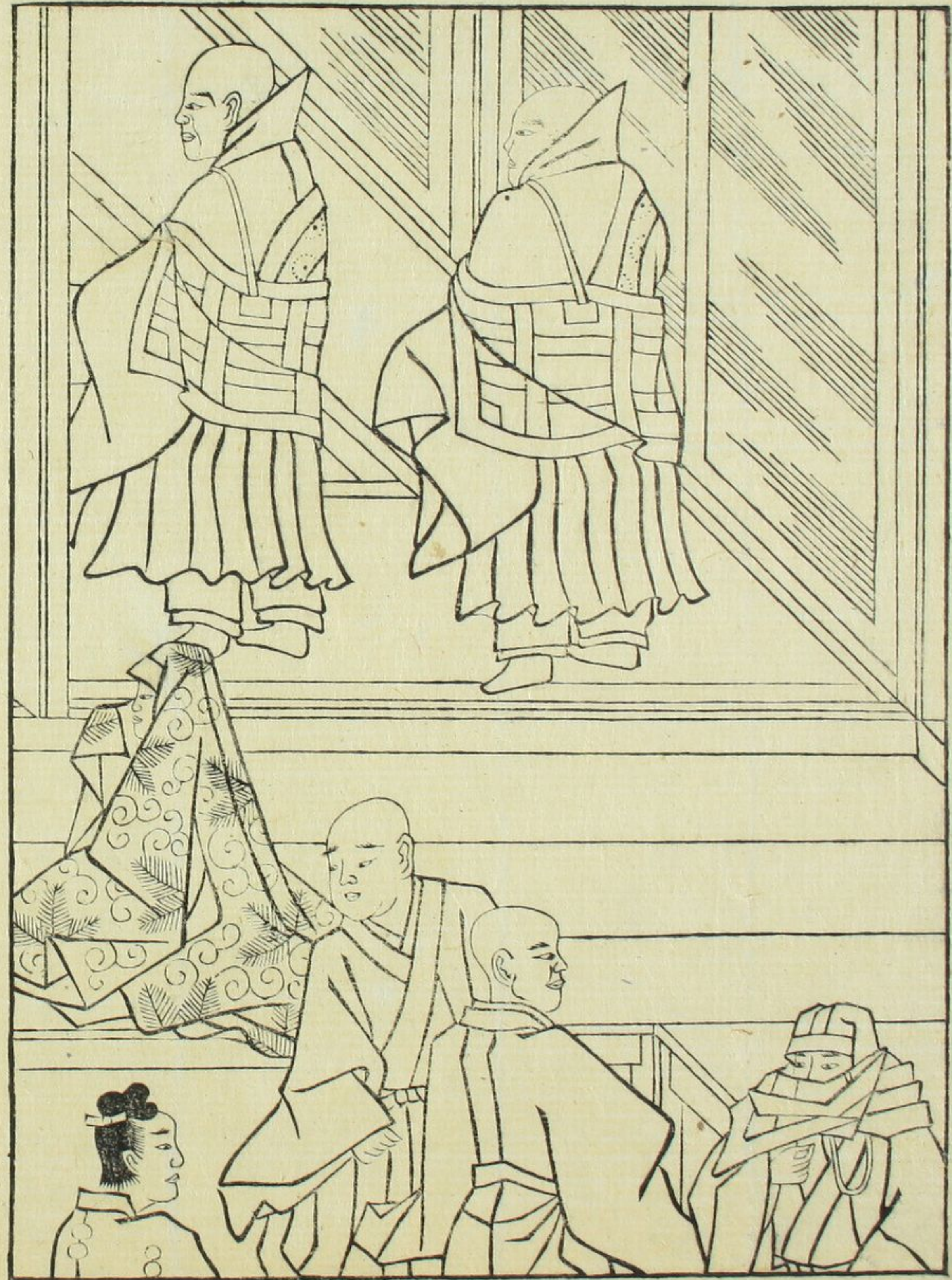
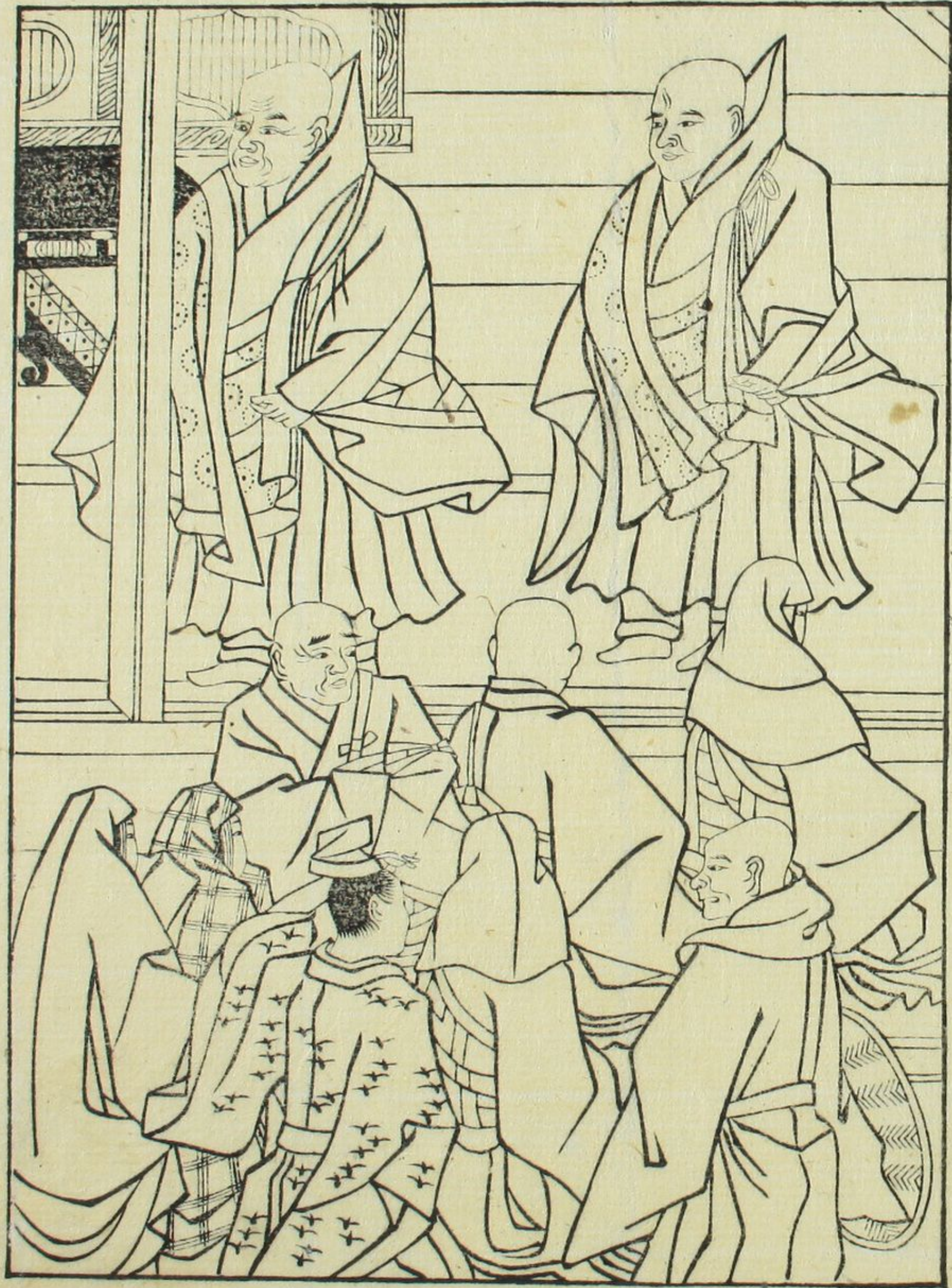




恩免ありといへども。たゞを洛中此往還をゆ家  
とれらり。一は攝津國勝尾寺に志とる。此を  
すこたより。とれて。善仲善筭の古跡。勝如  
上人往生地たり。上人西に谷より草菴をじ  
すびて。と見え。終つた。たわゆ。恒例此引聲乃  
念佛あり。今に僧衆此法服破壊して。見  
と。かち。此も。弟子法蓮房を。とて。京  
都の壇那よ。に。何て。して。將衣束十五具調  
して。施入せしむ。寺僧より。こびて。臨時よ。七日  
念佛を勤行し。つら。此菴室い。まに。あり。  
それ室よ。い。此も。を。の。つ。異香。飯。く。こ。せ  
た。も。侍。と。て。あ。ゆ。と。飯。を。こ。ぶ。人。に。ほ。く。ぞ  
侍。と。た。る。









類をこらひま。一實真如。一向專稱をあらは  
 らしめ。大聖世尊。自説して。南無佛と  
 唱へたまひし。それ名証あり。いふべきこそ。  
 意ハ弥陀の名号なり。又上宮太子。誕生して。  
 南無佛と唱へたまひし。それ體証あり。此  
 こそ。こころの極樂。此教主なり。まゝに  
 慈覺大師の念佛傳燈ハ。經文をいきて。寶池の  
 波々和すこそ。劣機の行よあり。此諸師

所立れ念佛三昧ハ佛境を縁して心地の塵を  
くくく下根の法とめよあつたは惠心僧  
都の要集よハ三道をけりて一心のまねいま  
よひぬへハ永觀律師ハ十因よハ十門をひ  
ぬきて一篇よハ法皇宣也上人の高聲念佛ハ  
聞名の益をあまひくすこと名号ハ徳を  
あつたは良忍上人ハ融通念佛ハ神祇  
冥道をすじきとも凡まれのそつこう

我大師法主上人行年四十三より念佛門よ  
いりてあまひくす易行道法とめりて  
ひろくをへたあふよ天子ハいりま玉の  
冠を西よかたゆけ月卿ハこれ金ハ笏を  
東よりあつたは皇后ハこしたる章提夫人の  
あとにほひ傾城のこらんたよ五百侍女よ  
そむしをまねふあつたあひひとめをこりて  
えてあまひくすまいたがれてこそ

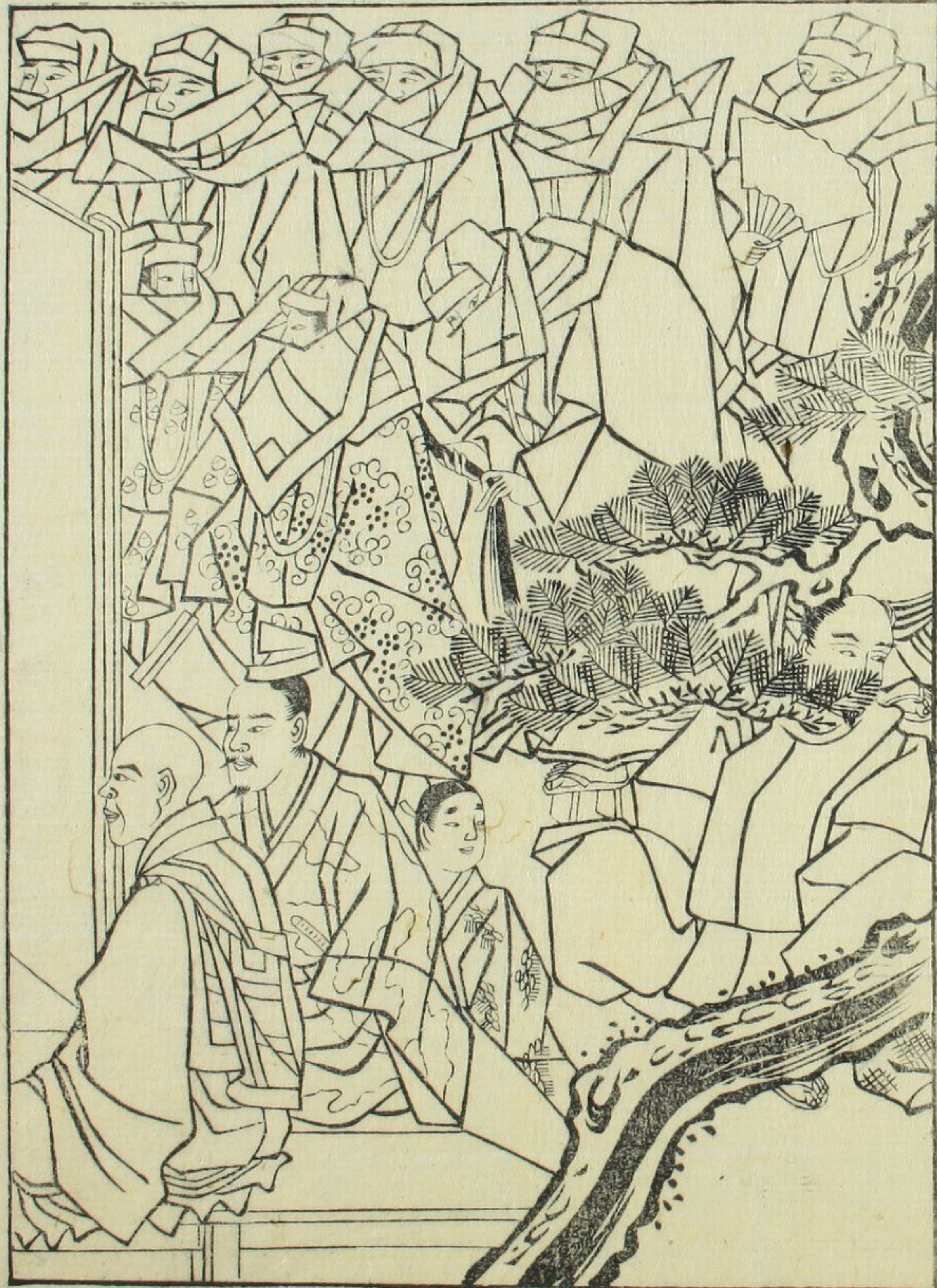
農まがとよき波ふじ。念佛をまて回ころ。  
織女ぐいと波ひく。念佛波もくたてぬきこ波。  
鈴をなほ波驛路よは。念佛をこたへて鳥を  
ごり。うれむる波たぐく海よは。念佛を  
唱へて鳥をほる。雪月花波見う人。西楼よ  
月をうけ。琴詩酒をまてあそぶころがらは。  
西の枝乃梨子をねる。こまこれ弥陀をあがめ  
ぶるをこし。瑕瑾ころ。珠數をころぶるをば

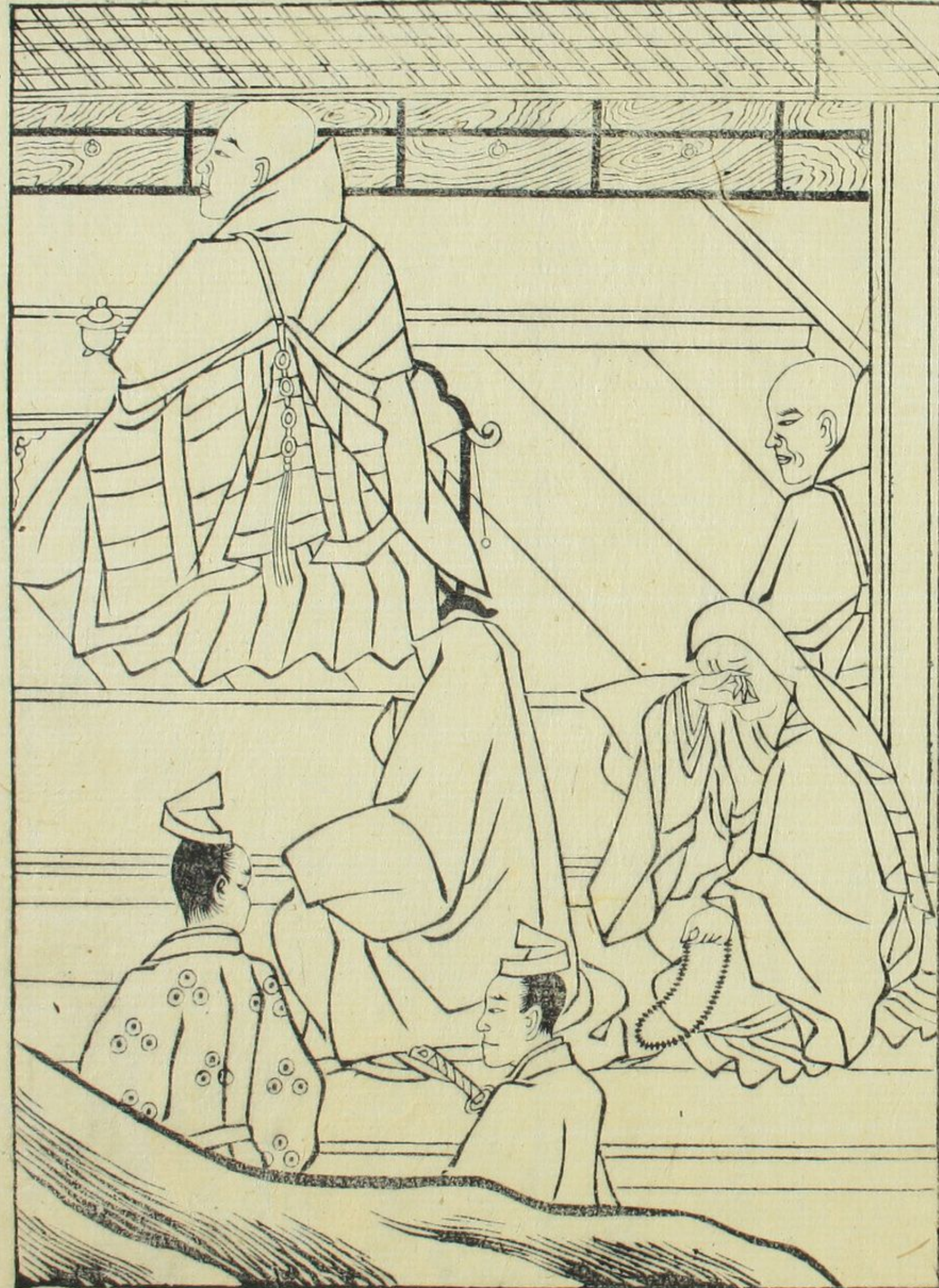
耻辱とゆく波まて花族英才ぬわといへとも。  
念佛せらるるをいたころ。免を包非人たりと  
いへとも。念佛するをいまてた波。故よハ切徳  
水乃波のうへよ。念佛れららと池りこら。  
三尊来運れ掌のころらよ。紫臺をころまに  
いよめ。ちつれぬ我ホる念佛せごころ。い。これ  
池の荒廢なり。我等う攸求をばる。なぞれ國の  
表弊なり。國れよまらこい佛れたの。こ。念佛を

まてもさ。人の福うい。ううのと。念佛を  
 もくはま。ゆ。何當座れ愚昧。公請。り。た  
 かへて。う。夜の。念佛を。されへ。く。抗。り。  
 私宅。い。で。く。る。日は。極樂。念。して  
 車。返。す。と。我。と。人の。教。誡。り。過。去。れ。宿。善。に  
 あ。げ。や。と。鼻。越。う。と。聲。を。し。せ。び。言。は。ま  
 き。て。と。う。と。あ。い。び。法。ま。た。と。て。返。あ。り。  
 聽。衆。を。て。を。志。や。ゆ。とい。ぬ。と。り











勝尾寺に隱居す。ついでに四箇年におもね花洛に往還  
た。後ゆるしにまごりしに。建曆元年夏にる。  
上皇八幡宮に御幸ありしとき一人の倡妓  
攢云星災の親疎なり。たゞ善人よくし。此  
王者の徳失よりりて國土に治乱ありしに  
南海の邊邑に訪ゆき事ありて日と往及す。  
昔哉昔哉近代君を殺く臣よりりて政よ  
ごり人よりり。王城の鎮守百王に宗廟連に

評定れ事あり。天下逆乱し率土荒廢せん。  
定て後悔ありんか。還御に後近臣等奏  
申し。倡妓が詫宣た。事よありしん。  
に不よそ。妖の徳よ。此に。邪に却く  
國に。妖に。し。徳改りし。此に。  
妖薩を。と。わ。ど。術。佛。法。に。歸。を。依。に。あ。わ。  
專修念佛停廢法然房配流を宥御計  
あ。人。を。や。と。勅。答。あ。さ。り。は。り。

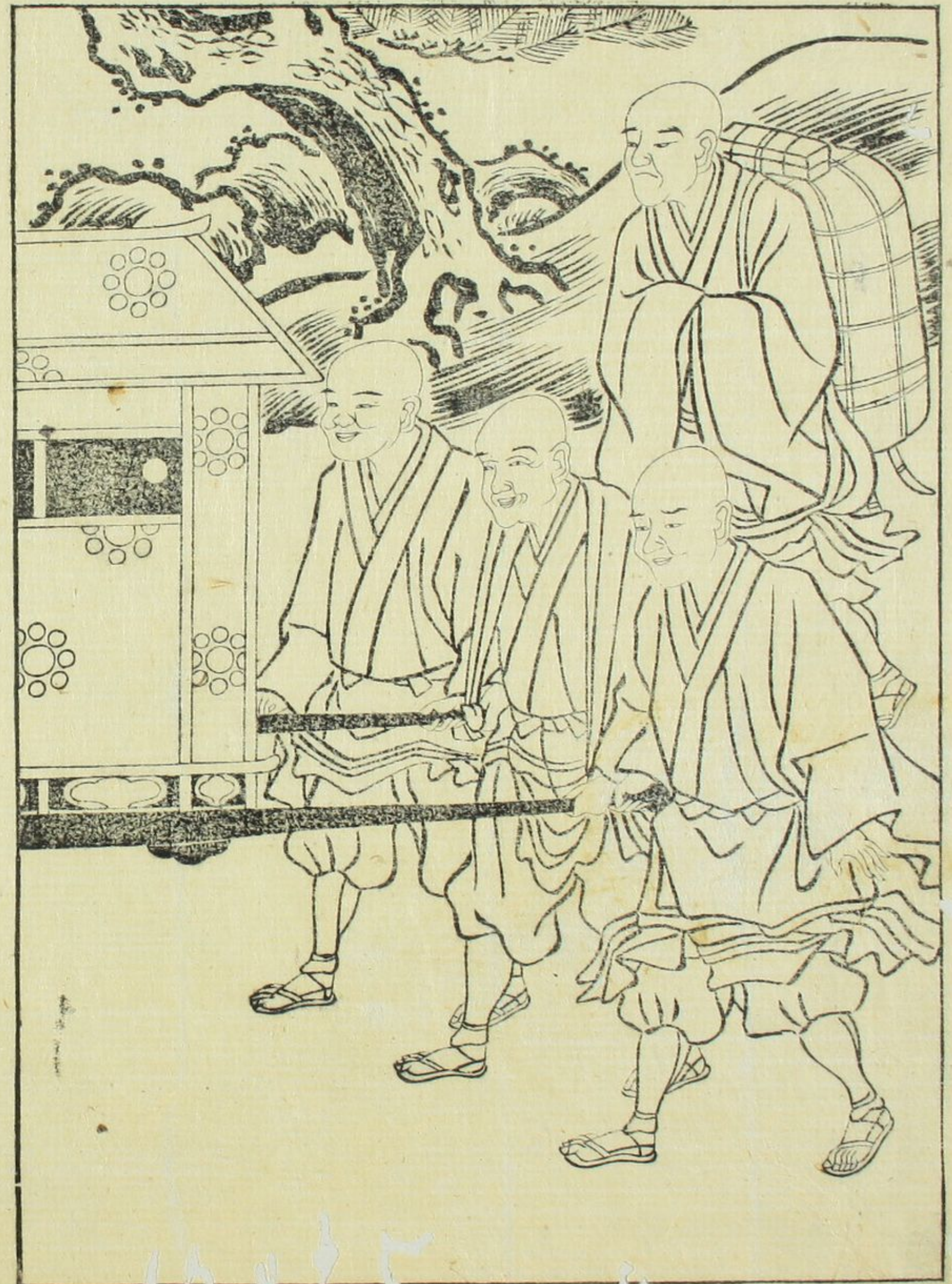
同年七月廿二日。上皇御夢想。御事は  
あり。蓮花王院。御系あり。衲衣を  
著。高僧ら。高倉先帝。圓戒の御師範  
故法皇。徳賢聖。益當今にあり。君大聖。權化をえて。還俗配流の罪あり。處し。咎五逆。わね。苦報を。藤中納言。こ。事。藤中納言。

光親卿。御夢想。次第。彼卿。往還。同十一月十七日。彼卿の奉行。還歸。烏頭變毛。宣下。山。徳。霞。九重の雲。

もつちたる。その後いくどくの歲月をへゆ。  
とげうに十箇年の間よ。兼久の逆乱なつて。  
天下れらぶれよをよひ。倡妓、詭宣いま  
思あつて。また上人友遷れ時門弟等  
歎め。とをれ。源宣の興と。浄土法門。  
濁世末代の出要なり。釋尊よ特留此經乃  
ちいぬく。諸佛よ攝受護念れ力おふな  
ま。ほせん。これ法の弘通ハ人いさめんと

すこそ法は。と。ほる。ゆ。ゆ。但し。じ  
ころろ。念佛守護れ神祇冥道。は。は。て  
無道れ障難を。と。め。強り。の。ら。に。ゆ。ゆ  
れ。い。あ。ゆ。へ。との。強。なる。事。れ。詭宣に  
た。い。ゆ。よ。と。に。思。議。よ。と。え。ゆ。





當寺に一切經しよきやうきんありしゆらるるより改かへまきし給たまへ。  
 上人じゆんじん所持しよぢりの一切經論しよきやうろん一藏いさうを施入せにゅうし給たまはれん。  
 住侶ぢゆりよ隨喜ずいき悅豫えつごして老若らうじやく七十餘人しちじゆじんを  
 しし香かう飯はんたき幡はたをけ蓋かきをこしして  
 じふふもてしつる。此こゝ經論きんろん開題かいだい供養くやうれた  
 めに聖せい覺かく法ぽう帝ていを招請せうきんして此こゝを造つくり貴命きめいを  
 つけ再會さいかいをしるこひて唱導じやうどう改かへし給たまはれ  
 ちり此こゝ表ひょう白はく云いふ。支し八萬はつまん此こゝ法藏ぽうざう八萬はつまん乃すなは衆しゆ



ト慈鎮和尚<sup>じしん</sup>此御沙汰<sup>ごさた</sup>として。大谷の禪房<sup>ぜんぼう</sup>に  
居住<sup>くじゆう</sup>せし。又たよりふじう<sup>ふじう</sup>釋尊<sup>しやくそん</sup>上天<sup>じやうてん</sup>の雲  
より降りて。諸<sup>しよ</sup>のいん天<sup>てん</sup>大會<sup>たいかい</sup>より拜見<sup>はいけん</sup>し  
たてまつらん事<sup>こと</sup>成<sup>なり</sup>あつて。いまよ上人<sup>じやうじん</sup>南海<sup>なんかい</sup>の  
波<sup>なみ</sup>をさうのほり。諸<sup>しよ</sup>のいん道<sup>どう</sup>俗<sup>じやく</sup>男女<sup>なんにょ</sup>を起<sup>おこ</sup>し。供養<sup>くじやう</sup>は  
のむん事<sup>こと</sup>成<sup>なり</sup>いよなむ。群衆<sup>ぐんしゆ</sup>衆<sup>しゆ</sup>れらる。其<sup>その</sup>夜<sup>よ</sup>に  
うらに一千餘人<sup>いっせんじゆじん</sup>をさし。こえり。幽閑<sup>ゆうかん</sup>の地<sup>ち</sup>を志<sup>し</sup>す。  
諸<sup>しよ</sup>のいんへとも。日<sup>ひ</sup>こそ衆<sup>しゆ</sup>請<sup>じゆ</sup>れ。人<sup>ひと</sup>連綿<sup>れんめん</sup>として。たえ

はらき





